

広島大学平和科学研究センター外部評価報告書
(2008 年 4 月～2015 年 3 月)



広島大学平和科学研究センター編
〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89
TEL 082 542 6975
FAX 082 245 0585
E-mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/>

目次

あいさつ	1
I. 広島大学平和科学研究センターの活動概要	3
1. 設立の経緯と目的・使命	4
2. 機構・運営	5
3. 研究・教育活動	6
3-1 研究活動	6
(1) シンポジウム	6
(2) 研究会	9
(3) 紀要	10
(4) 研究報告シリーズ	13
(5) 文献資料及びデータの収集と整理	14
(6) 専任研究員の主な研究活動（2008 年 4 月～2015 年 3 月）	14
(7) 研究費等の採択状況（2008 年度～2014 年度）	24
3-2 教育活動	27
4. 社会活動	30
5. センタースタッフ	32
5-1 歴代センター長	32
5-2 センタースタッフ（2015 年度）	32
6. 2008-2015 年度 平和科学研究センター予算	35
別紙 1. 広島大学平和科学研究センター規則	36
II. 外部評価委員会における外部評価委員との意見交換	41
1. センター長あいさつ	42
2. 外部評価委員会概要	44
3. 各委員との意見交換、各委員からの評価の概要	45
4. 活動報告の際に使用したスライド資料（説明者：川野徳幸教授）	47
5. 各委員との意見交換、各委員からの評価の記録	80
おわりに	97

あいさつ

広島大学・平和科学研究センターは、私がセンター長として着任した 2014 年 4 月以降、従来の紀要『広島平和科学』や『IPSHU 研究報告シリーズ』の発行、研究会の開催に加え、海外の平和関連機関とのネットワーク構築事業も積極的に展開し、国際シンポジウムや講演会を開催するなど国際的な発信力の強化に努めております。

本報告書は、2016 年 2 月に平和科学研究センターが実施した 2008 年 4 月から 2015 年 3 月までの事業内容に対する外部評価報告書です。これまでの私たちの活動内容、それに対する評価委員の先生方の評価を記録しています。外部評価委員会の先生方からのご意見を踏まえて、今後の平和科学研究センターの発展に努めていきたいと考えております。

これまで当センターの活動にご支援、ご協力頂いた多くの関係者の皆さま、また、ご多忙の中、外部評価委員として真摯にご評価頂きました明治学院大学国際学部教授・国際平和研究所所長の高原孝生先生、広島市立大学広島平和研究所副所長の水本和実先生、ならびに広島大学大学院総合科学研究科教授の布川弘先生に心から感謝申し上げます。

2016 年 5 月 1 日

広島大学平和科学研究センター長
西田 恒夫

I. 広島大学平和科学研究センターの活動概要

1. 設立の経緯と目的・使命

広島大学平和科学研究センターは、広島大学の全学的施設として平和科学に関する研究・調査と資料の収集を行うことを目的として、1975年7月8日学内措置により発足した。当センターは、平和学の学術的研究機関としては日本最初のものであり、現在なお国立大学における唯一の平和学研究機関である。

1974年8月9日広島大学平和科学研究所準備会は、さしあたり学内措置による設立を要望して「平和科学研究推進のための当面の措置に関する建議」を提出した。これを受けた、1975年2月、評議会は学長を委員長とする平和科学研究センター設立準備委員会の設置を了承した。同準備委員会は「広島大学平和科学研究所（センター）構想」（1975年6月24日）を策定し、7月8日の評議会に報告した。こうして同評議会において「平和科学研究センター規程」が承認されることになった。

それ以後、当センターは学内措置による研究機関として活動が続けたが、2004年4月における広島大学の国立大学法人化にともない、正式に独立した研究センターとして存立することになった。

設立以来、着実に教育・研究の実績を積み上げてきた当センターであるが、近年は、人員不足、人的ネットワーク構築という二つの課題の克服に取り組んでいる。その一環として、2014年4月1日から、教員5名体制で新たな平和科学研究センターをスタートさせ、その舵取り役として西田恒夫元国連大使をセンター長に迎えた。就任後、西田センター長は、外交官としての豊富な経験を生かし、特に海外の平和関連機関とのネットワークの構築、さらには、平和科学研究センターの発信力の強化に取り組んでいる。

2. 機構・運営

当初、当センターの基本方針及び管理運営に関する重要事項は、管理委員会（委員長は学長、各部局長とセンター長で構成）により審議、決定される体制がとられた。そして当センターの運営に関する具体的な事項は、全学の代表、センター長、センタースタッフで構成される運営委員会が審議、決定することになった。しかし 1994 年 4 月 1 日には、管理委員会が廃止され、運営委員会がその業務をになうことになった。

運営委員会は、センターに関し次に掲げる事項を審議する。

- (1) 管理運営の基本方針（教員人事・予算の原案作成等を含む）に関すること
- (2) 事業計画に関すること
- (3) その他センターの運営に関すること

2015 年 3 月 31 日時点の平和科学研究センタースタッフは、センター長、専任研究員（特任教授 1 名、教授 1 名、准教授 1 名、助教 1 名）、学内兼任研究員（22 名）、客員研究員（学外研究者の兼任、40 名）、顧問（3 名）、事務補佐員 1 名で構成される。センターの運営支援については、教育・国際室国際交流グループが行っている。

3. 研究・教育活動

3-1 研究活動

平和科学研究センターは、平和科学の研究・調査と資料の収集を目的とする。この目的のため、当センターは、以下の3点に重点を置いた活動を行っている。

また、2014年4月、西田恒夫元国連大使がセンター長として着任以来、平和関連機関とのネットワーク構築事業も積極的に展開している。

- ・平和科学に関する研究、特に学内外の研究者を組織した平和科学研究の推進と組織化
- ・平和科学に関する文献資料及びデータの収集と整理
- ・平和科学に関する研究成果、情報の提供

平和学に関する研究は、研究課題を定め、学内外の研究者を組織したセンター共同研究プロジェクトの推進と、専任研究員の個別研究に大別される。共同研究に関しては、外部資金等を導入した共同研究、年2回開催のシンポジウム（広島大学平和科学シンポジウム）、年5～6回程度開催のセンター研究会、その他の学内外研究機関・団体との共催による研究会・シンポジウムなどを行い、研究の推進を図っている。

またセンターの研究活動の成果は、学会誌等に報告されるほか、主としてセンター紀要及び研究報告シリーズの二つの出版物によって公開され、国内外の研究者、研究機関に配布している。また、収集した資料あるいは作成したデータについても適宜情報を公開し、研究者の利用に供している。

(1) シンポジウム

広島大学平和科学シンポジウムは、平和科学研究の深化に資するテーマを設定し、複数の講師を招聘して開催している。2008年4月以降のシンポジウムの詳細は以下のとおりである。

第33回 核の被害再考（2008.11.28）

- 川野徳幸 セミパラチンスク地区の核被害：アンケート調査・聞き取り調査から見えてくるもの
- 今中哲二 チェルノブイリ原発事故の調査を通して学んだこと
- 山本政儀 ビキニ原爆被災事件から半世紀：今思うこと
- 濱谷正晴 原爆体験と〈心の傷〉

第34回 Current Challenges for Peacebuilding in Sierra Leone and Liberia（2010.2.25）

（第189回 IDEC アジアセミナーとの共催）

Memunatu Pratt

Anthony Lombeh Hena

第 35 回 環境と平和 (2010.12.23)

(故松尾雅嗣先生追悼記念)

石田紀郎 カザフ・アラル海の環境破壊

今中哲二 チェルノブイリ原発事故とその影響

実川悠太 水俣病被害の実態

第 36 回 広島、そして福島復興 (2012.1.29)

(広島平和構築人材育成センター、ピースビルダーズとの共催)

【基調講演】 山川充夫 福島の復興－南相馬市民復興会議を中心に－
斎藤紀 福島の直面している課題

【パネリスト】 田中章弘、石田紀興、下久保誠司、衣山弘人

第 37 回 原爆研究の残された課題 (2012.8.5)

(広島大学文書館、広島大学原爆放射線医科学研究所計量生物研究分野との共催)

平岡敬 韓国人被爆者問題を振り返って

許光茂 韓国における被爆者問題

大瀧慈 広島原爆被爆者のがん死亡危険度は直爆被曝線量では説明できない？

第 38 回 これからの平和研究を考える (2014.3.15)

佐藤幸男 岐路にある平和学

山根達郎 平和のための新しい国際紛争論

友次晋介 核と人間の安全保障－平和研究と安全保障学の交叉－

第 39 回 混沌とする世界における国際機関の強化－ヒロシマの果たす役割は－
広島大学平和科学研究センター／新潟県立大学共催国際シンポジウム
(2014.11.21)

【第Ⅰ部】 戦後国際関係に果たした国際機関の役割

G. John Ikenberry The Future of Multilateralism: Governing the
World in a Post-Hegemonic Era

天野万利 『ジュネーブ軍縮会議』の取り組み－その成果と現状

猪口孝 War Occurrence and Multilateral Institutions

【第Ⅱ部】 混沌とする世界における国際機関の強化

David Held Gridlock: Why Global Cooperation is Falling When
We Need it Most

弓削昭子 Post-2015 Development Agenda and the Role of the
United Nations

西田恒夫 混沌とする世界と国際機関の強化

【基調講演】 明石康 日本と世界の当面するチャレンジ

【第Ⅲ部】 ヒロシマは何ができるのか？

Brian Finlay MULTILATERALISM IN A GLOBALIZED
WORLD: Meeting Grand Global Challenges

水本和実 被爆地からの訴えは核軍縮を促したか

山本武彦 北東アジア非核兵器地帯の実現に向けた広島役割

川野徳幸 「ヒロシマ」の思想、そして今後の「ヒロシマ」の役割

第 40 回 次世代に未来をどう引き継いでいくかー持続可能な開発のための
教育（ESD）の観点からー（2015.2.4）

木曾功 ESD の 10 年の取組みとこれから

中山修一 韓国と広島での ESD の実践

＜共催のシンポジウム等＞

○第 2 回日韓平和研究セミナー（2008 年 6 月 18 日ー韓国済州市）

済州大学平和研究所と共催

○3rd International Conference on Peace Studies and Peace Discourse in Education

（2008 年 9 月 23～25 日ーロシア、トムスク市）

トムスク教育大学と共催

○第 14 回広島国際シンポジウム

「セミパラチンスクにおける放射線の影響」（2009 年 3 月 26 日）

原爆放射線医科学研究所主催

○第 3 回日韓平和研究セミナー（2009 年 10 月 31 日ー韓国済州市）

済州大学平和研究所、済州大学法学部、世界島嶼学会、科研研究会

「平和協力への「もう一つの道」」と共催

○第 15 回広島国際シンポジウム

「世界の被ばく者の放射線被ばくとその影響」（2010 年 3 月 5 日）

原爆放射線医科学研究所主催

○第 16 回広島国際シンポジウム

「広島の黒い雨と関連する課題」（2011 年 1 月 12 日）

原爆放射線医科学研究所主催

○第 17 回広島国際シンポジウム

「世界の放射線被ばくとその影響」（2012 年 1 月 25 日）

原爆放射線医科学研究所主催

○第 18 回広島国際シンポジウム

“Additional Factors in Hiroshima Radiation Effects due to Atomic Bomb
-Biophysical and Biometrical Challenges to Assessing Health Hazard-”

(2013 年 1 月 31 日～2 月 1 日)

原爆放射線医科学研究所主催

○第 1 回島根・セメイ国際シンポジウム

「世界の核被ばく問題～セミパラチンスク核実験場から福島原発事故へ～」

(2015 年 1 月 24 日)

島根大学医学部総合医療学主催

○第 19 回広島国際シンポジウム

「広島・長崎原爆における残留放射線の影響」(2015 年 1 月 26 日)

原爆放射線医科学研究所主催

(2) 研究会

平和科学研究センター研究会は、国内外の研究者による平和学及びその関連分野のテーマについての研究報告・講演を行うものである。他機関との共催や、複数の講師を招聘したシンポジウムなどの形式で行うこともある。2008 年 4 月以降の研究会の記録は、以下の通りである。

177 回 2008. 7. 9 高田陽子：20 世紀メコンデルタ開拓の中の諸民族

178 回 2008.10.29 Tarja Vayrynen：The Role of Silence in Post-Conflict
Peacebuilding

179 回 2009. 1.21 Diana Petkova：National Identity in the Process of Globalization

180 回 2009. 1.27 Current Challenges for Peacebuilding in Afghanistan

宮原信孝：“Human Security”and Nation Building in Afghanistan

加藤美和：Impact of illicit drugs on the Afghan peacebuilding
process and the establishment of the rule of law

工藤正樹：Security Sector Reform in Afghanistan

柿澤福郎：The current security situation of Afghanistan

181 回 2009. 2.12 毛利和子：現代中国外交へのアプローチ

182 回 2009. 7. 2 Robert McMahon：The 1971 India-Pakistan War and US Foreign
Policy

183 回 2009. 7. 6 Yakov M Rabkin：The Zionist Revolution as Modern Jewish
Identities

184 回 2009. 7. 8 伊藤成朗：Health insurance in rural India: Strategies to assess
People’s perceptions

- 185 回 2010. 3.17 宜保博哉：沖縄県平和祈念資料館における収蔵資料の活用
- 186 回 2010. 5.14 井上実佳：国連平和維持活動（PKO）と「保護する責任」
- 187 回 2010.10.13 西田竜也：A Comparative Analysis of the U.S. Alliance System in
the Asia-Pacific: A Perspective of Alliance Theories
- 188 回 2011. 3.16 Volodymyr Tykhyy：Solving the social problems of the Chernobyl
Sufferers: it's not over yet
- 189 回 2012. 1.23 葉佐井博巳：私の平和論－研究者として、そして入市被爆者として－
- 190 回 2012. 1.20 Nayani Melegoda：Statebuilding in Afghanistan
- 191 回 2012. 1.27 Memunatu Pratt：Sierra Leone's Peacebuilding and Development:
Prospects and Challenges
- 192 回 2012.10.31 日本の近代史における東北～あらためて復興を問い直す
山内明美：＜東北＞から生存基盤を考える
後藤一磨：南三陸町防災対策庁舎の存置・撤去問題について
～原爆ドームとの比較～
河西英通：東北史から築く「平和と生存」の足場
- 193 回 2012.11. 2 Alan Hunter：Coventry, Peace and Reconciliation
- 194 回 2012.12. 4 久保田弘信：戦場カメラマンがみたアフガニスタン・イラク
- 195 回 2013. 6. 3 菅野哲：飯舘村民の避難生活の現状、そして今後は
- 196 回 2014. 1.21 久保田弘信：シリア内戦の現状と国際社会
- 197 回 2014. 6.16 菅野哲：飯舘村民の現状、そしてこれから
- 198 回 2014. 6.30 今中哲二：チェルノブイリとフクシマ
～放射能汚染と向き合うためには～
- 199 回 2014. 8. 4 開沼博：歴史的危機に学問はいかに向き合うべきか
～福島学構築プロジェクトの実践から～
- 200 回 2014.11.22 ESD の 10 年と地域の取り組み
【基調講演】三宅博之：ESD の 10 年と北九州市の取り組み
【事例紹介】小倉亜紗美：広島地区の ESD の取り組みと平和学
青山秀雄：マレーシア・サワラク州での ESD 活動に参加して
- 201 回 2015. 1.23 藤本穰彦：足元からつくる平和－地域開発と環境からのアプローチ
- 202 回 2015. 3.19 佐藤尚平：中東情勢と国際政治史

(3) 紀要

『広島平和科学』は、年 1 回刊行のセンター紀要である。印刷部数は 400 部、国内外の研究者、研究機関、図書館へ配布している。

第 30 号(2008)

松尾雅嗣・谷整二：広島原爆投下時の避難－川と橋を超えて
川野徳幸・平林今日子・松尾雅嗣・カズベック・アブサリコフ

タルガット・モルダガリエフ・大瀧慈：セミパラチンスク地区住民の核実験体験－線量と距離に関して

小柏葉子：太平洋島嶼諸国の紛争と地域協力－グッド・ガバナンス構築に向けての試み－

池野範男・川口広美・田口紘子・井上奈穂・伊藤直哉・南浦涼介・河村直明・三反田隆志：中学生の平和意識・認識の変容に関する実証的研究－单元「国際平和を考える」の実践・評価・比較を通して－

Hideaki SHINODA: The Difficulty and Importance of Local Ownership and Capacity Development in Peacebuilding

第 31 号(2009)

ロニー・アレキサンダー：軍事化・生政治に直面する女たち～太平洋地域からの考察～
村上登司文：中学生の平和意識についての比較－上海、ホノルル、デンバー、京都の 4 都市の中学生の意識調査から－

Tetsuji IMANAKA and Noriyuki KAWANO : Radioactive Contamination and Social Consequences Caused by the Chernobyl Nuclear Accident

松尾雅嗣：核被害、紛争被害地域の平和観の国際比較

Tatsuo YAMANE : State failure and Armed Group: An Implication for Peacebuilding

Tetsuro IJI and Hideki FUCHINOUE : Toward a Better Understanding of Multiparty Mediation in International Relations

篠田英朗：平和構築における現地社会のオーナーシップの意義

第 32 号(2010)

篠田英朗：平和構築における現地社会オーナーシップ原則の歴史的・理論的・政策的再検討

中園和仁：マカオの地位をめぐる中葡関係

山下明博：世界遺産をめぐる国境紛争の原因

毛利聡子：国境を越える対抗運動の担い手－世界社会フォーラムの 10 年を検証する－
川野徳幸・大瀧慈・岡田高旺：広島原爆投下後の爆心地付近における延焼状況の視覚化

Ajith Balasooriya and Hideaki SHINODA : The “Responsibility to Protect” at the End of Conflict: The Role of the International Community in Post-Conflict Peacebuilding in Sri Lanka

第 33 号(2011)

山下明博：世界遺産を巡る紛争における国際司法裁判所の役割

村上登司文：地方自治体の平和啓発事業と学校教育との協同

三上貴教：平和ランキングに基づく主要国比較から得られる示唆

長谷川晋・上杉勇司：イラク治安部門改革（SSR）への民間安全保障会社（PSC）の使用に関する米軍と英軍の違いの考察－反乱鎮圧作戦の経験と正当性に対する理解の

相違からの説明

池田佳代・川野徳幸：グアム統合軍事開発の人種政治的側面に関する考察－グアム島公共水道システムを事例に－

川野徳幸：【研究ノート】チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への聞き取り調査備忘録：フクシマそして原発を考えるためにも

篠田英朗：平和構築における現地社会のオーナーシップと国家建設のジレンマ－シエラレオネとスリランカの事例を中心にして－

第 34 号(2012)

Reuben LEWIS and Hideaki SHINODA : Operationalizing Early Warning for Conflict Prevention and Peacebuilding in West Africa: A Case Study of ECOWAS Early Warning System

村上登司文：沖縄の平和教育についての考察－小中学生の平和意識調査から－

千代章一郎：丹下健三による「広島平和公園計画」の構想過程

山下明博：オスプレイの安全性に対する懸念

西佳代：アメリカのアジア太平洋地域に対する軍事的関与の構造－海軍によるグアム島統治史を中心に－

平林今日子・川野徳幸・Talgat MULDAGALIYEV・Kazbek APSALIKOV・大瀧慈：セミパラチンスク核実験場近郊住民の精神的影響、そしてその背景要因

辛享根・川野徳幸：韓国人原爆被害者研究の過程とその課題

川野徳幸：広島大学学生の方爆・原爆被害理解度に関する試論

第 35 号(2013)

Tatsuo YAMANE : Securing Security Governance in Post-conflict Situation: A Framework of Conflict Prevention through ECOWASRN in West African Region

三上貴教：「ひろしまレポート」ランキング化試論－地球平和指数ランキングとの比較を交えて－

村上登司文：ドイツの平和教育の考察－ギムナジウムでの調査を中心に－

松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸：広島の方和観－平和宣言を通して－

辛享根・川野徳幸：韓国人被爆者問題をめぐる草の方交流

第 36 号(2014)

外川昌彦：マハトマ・ガンディーと原子爆弾－核抑止論と非暴力運動の意味

篠田英朗：国連 PKO における「不偏性」原則と国際社会の秩序意識の転換

三上貴教：グローバルに民主主義を支えうる人材育成のための英語ディベートについて－アカウンタビリティ、クリティカル・シンキング、そして英語力－

友次晋介：医療保険外交の一里塚としての「アジア医療機構構想」－政治過程・教訓・遺産に関する一考察－

松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸：長崎の平和観—長崎平和宣言頻出単語の解析を通して

—
Jaroslav KRASNY and Noriyuki KAWANO : Weapons of Mass Destruction and the
Principle of Unnecessary Suffering: The Use of Nuclear Weapons in an Armed
Conflict

小倉亜紗美：【研究ノート】短期留学プログラムを通じた広島大学「平和教育」の試み

(4) 研究報告シリーズ

研究報告シリーズ(和文シリーズ及び英文シリーズ)は、不定期刊の研究報告書であり、年1-2点を刊行している。印刷部数は、400部である。これまでに和文シリーズ51点、英文シリーズが30点、それぞれ刊行されている。

<和文>

- No.40 篠田英朗(編)：現代平和構築活動の視点から見た広島の戦後復興史(2008)
- No.41 松尾雅嗣(編著)：核の被害再考(2009)
- No.42 平和科学研究センター(編)：松尾雅嗣教授退職記念論文集 平和学を拓く(2009)
- No.43 松尾雅嗣・谷整二(編)：『ゆうかりの友』関連 原邦彦資料目録(2010)
- No.44 川野徳幸(編)：大北威 寄贈資料目録(原爆関連資料)(2010)
- No.45 上杉勇司・長谷川晋(編)：平和構築と治安部門改革(SSR)ー開発と安全保障の視点からー(2010)
- No.46 川野徳幸・今中哲二・竹内高明(編)：チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録(2012)
- No.47 篠田英朗・淵ノ上英樹：平和構築としての日本の近代国家建設：研究序論(2012)
- No.48 川野徳幸・今中哲二(編)：ある「広島原爆早期入市者」の記録(2013)
- No.49 山下明博：軍事目的の無人航空機の危険性(2014)
- No.50 塩崎洋一・淵ノ上英樹：津波対策として議論され白杵小学校移転統合問題におけるPTAおよび地域住民としての取り組みについて(2014)
- No.51 平和科学研究センター(編)(責任編集：友次晋介・小倉亜紗美)：
広島大学平和科学研究センター／新潟県立大学共催国際シンポジウム混沌とする世界における国際機関の強化ーヒロシマの果たす役割はー(2015)

<英文> IPSHU Research Report Series

- No.22 Hideaki SHINODA (ed.): *Post-war Reconstruction of Hiroshima: From the Perspective of Contemporary Peacebuilding* (2008)
- No.23 Masatsugu MATSUO, Vladimir ROUVINSKI and Rafael SILVA VEGA (eds.):
Peace and Human Security (2009)
- No.24 Yuji UESUGI (ed.): *Toward Bringing Stability in Afghanistan: A Review of the Peacebuilding Strategy* (2009)

- No.25 Hideaki SHINODA (ed.): *Peacebuilding in South Asia: Challenges and Opportunities* (2011)
- No.26 Hideaki SHINODA (ed.): *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sri Lanka* (2012)
- No.27 Hideaki SHINODA (ed.): *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sierra Leone* (2012)
- No.28 Tetsuji IMANAKA, Noriyuki KAWANO and Masaharu HOSHI (eds.):
Proceedings of the 17th Hiroshima International Symposium –Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development- (2012)
- No.29 Bertha Z. Osei-Hwedie, Treasa Galvin and Hideaki SHINODA (eds.):
Indigenous Methods of Peacebuilding in Africa (2012)
- No.30 Nayani MELEGODA and Hideaki SHINODA (eds.): *Peacebuilding Issues in Contemporary Sri Lanka* (2013)

(5) 文献資料及びデータの収集と整理

平和学とそれに関わる学術文献資料の収集、整理については、所蔵学術図書約 10,000 点、所蔵学術雑誌は約 60 点であり、平和学の文献資料としては、国内国外の他研究機関と比較して誇るに足るものである。近年学内外からの貸出申込が相当数あることは、この証左である。

図書については、すべての蔵書をコンピュータに入力し、簡易に検索できる体制を整えている。

(6) 専任研究員の主な研究活動（2008 年 4 月～2015 年 3 月）

●松尾雅嗣（教授 2008 年 4 月～2009 年 3 月）

<編著書>

松尾雅嗣（編）『核の被害再考』、IPSHU 研究報告シリーズ No. 41、2009 年

Masatsugu MATSUO, Vladimir ROUVINSKI and Rafael SILVA VEGA (eds.) *Peace and Human Security*, IPSHU English Research Report Series 23, pp. 57-72, Also translated into Spanish Revista CS No. 3, pp. 75-92, Faculty of Law and Social Sciences of Icesi University, 2009

<学術論文>

Masatsugu MATSUO “Conflict over the Official Language: Some Case Studies”, *Proceedings of the 2nd International Conference on “Peace Studies and Peace Discourse in Education”, June 14-16, Tomsk Russia*, Tomsk State Pedagogical University, 2008

松尾雅嗣、谷整二「広島原爆投下時の避難：川と橋を越えて」、『広島平和科学』30 号、

1-25 頁、2008 年

Masatsugu MASTUO “Language and Ethnicity: An Iridescent Relation”, Masatsugu MATSUO, Vladimir ROUVINSKI and Rafael SILVA VEGA (eds.) *Peace and Human Security*, IPSHU English Research Report Series 23, pp. 57-72, Also translated into Spanish Revista CS No. 3, pp. 75-92, Faculty of Law and Social Sciences of Icesi University, 2009

松尾雅嗣「核被害、紛争被害地域の平和観の国際比較」、『広島平和科学』31 号、87-107 頁、2009 年

●小柏葉子（2008 年 4 月～2009 年 3 月准教授、2009 年 4 月～2010 年 3 月教授、
2010 年 4 月社会科学研究科へ異動）

< 編著書 >

Yoko OGASHIWA (ed.), *Indigenous Governance and Peace*, Hiroshima University Partnership Project for Social Capacity Development for Peacebuilding and International Cooperation Discussion Paper Series Vol. 3, 2008

< 学術論文 >

小柏葉子「太平洋島嶼諸国の紛争と地域協力—グッド・ガバナンス構築に向けての試み—」、『広島平和科学』30 号、49-70 頁、2008 年

Yoko OGASHIWA “The Participation of “Civil Society” in Regionalism and Peacebuilding in the Pacific Island Countries”, Institute for Peace Science, 広島大学平和科学研究センター（編）『松尾雅嗣教授退職記念論文集 平和学を拓く』、IPSHU 研究報告シリーズ No. 42、32-50 頁、2009 年

●篠田英朗（2008 年 4 月～2013 年 3 月准教授、2013 年 4 月東京外国語大学に転出【教授】）

< 編著書 >

篠田英朗（編）『現代平和構築活動から見た広島の後復興史』、IPSHU 研究報告シリーズ No. 40、2008 年

Hideaki SHINODA (ed.) *Post-war Reconstruction of Hiroshima: From the Perspective of Contemporary Peacebuilding*, IPSHU English Research Report Series No. 22, 2008

Hideaki SHINODA (ed.), *Peacebuilding in South Asia: Challenges and Opportunities*, IPSHU English Research Report Series No. 25, 2011

Hideaki SHINODA (ed.), *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sri Lanka*, IPSHU English Research Report Series No. 26, 2012

Hideaki SHINODA (ed.), *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sierra Leone*, IPSHU English Research Report Series No. 27, 2012

Bertha Z. OSEI-HWEDIE, Treasa GALVIN and Hideaki SHINODA (eds.), *Indigenous*

Methods of Peacebuilding in Africa, IPSHU English Research Report Series No. 29, 2012

篠田英朗、淵ノ上英樹『平和構築としての日本の近代国家建設：研究序論』、

IPSHU 研究報告シリーズ No.47、2012 年

篠田英朗『「国家主権」という思想：国際立憲主義への軌跡』、勁草書房、2012 年（第 34 回サントリー学芸賞受賞）

< 学術論文 >

篠田英朗「コソボ：分断された社会の統治における民軍関係」、上杉勇司、青井千由紀（編）『国家建設における民軍関係：破綻国家再建の理論と実践をつなぐ』（国際書院）、283-298 頁、2008 年

篠田英朗「重層的な国際秩序観における法と力：『モンロー・ドクトリン』の思想的伝統の再検討」、大沼保昭（編）『国際社会における法と力』（日本評論社）、231-274 頁、2008 年

篠田英朗『国際法学の国内モデル思考』批判の射程：その可能性と限界」、中川淳司、寺谷広司（編）『大沼保昭先生記念論文集 国際法学の地平：歴史、理論、実証』（東信堂）、87-106 頁、2008 年

篠田英朗「スーダンという国家の再構築：重層的紛争展開地域における平和構築活動」、武内進一（編）『戦争と平和の間：紛争勃発後のアフリカと国際社会』、IDE - JETRO 研究双書（アジア経済研究所） No. 573、59-89 頁、2008 年

Hideaki SHINODA “The Difficulty and Importance of Local Ownership and Capacity Development in Peacebuilding”, *Hiroshima Peace Science* 30, pp. 95-115, 2008

篠田英朗「平和構築としての広島戦後復興」、篠田英朗（編）『現代平和構築活動から見た広島戦後復興史』、IPSHU 研究報告シリーズ No. 40、2-24 頁、2008 年

Hideaki SHINODA “Post-war Reconstruction of Hiroshima as a Case of Peacebuilding”, Hideaki SHINODA (ed.) *Post-war Reconstruction of Hiroshima: From the Perspective of Contemporary Peacebuilding*, IPSHU English Research Report Series No. 22, pp. 2-24, 2008

Hideaki SHINODA “Nation-States, Peacebuilding and Global Society: Globalism, Regionalism and Nationalism in the Contemporary Theory of State Sovereignty with Special Reference to the Discourse on the Responsibility to Protect”, Masatsugu MATSUO, Vladimir ROUVINSKI and Rafael SILVA VEGA (eds.) *Peace and Human Security*, IPSHU English Research Report Series 23, pp. 1-19, Also translated into Spanish Revista CS No. 3, pp. 21-38, Faculty of Law and Social Sciences of Icesi University, 2009

篠田英朗「平和構築プロセスとしての日本の近代化と戦後復興：内的平和と外的平和」、広島大学平和科学研究センター（編）『松尾雅嗣教授退職記念論文集 平和学を拓く』、IPSHU 研究報告シリーズ No. 42、492-522 頁、2009 年

Hideaki SHINODA “What Was Wrong With Afghanistan? Reflection upon the Past and

- Prospect for the Future”, Yuji UESUGI (ed.) *Toward Bringing Stability in Afghanistan: A Review of the Peacebuilding Strategy*, IPSHU English Research Report Series No. 24, pp. 13-24, 2009
- Hideaki SHINODA “Human Security Initiatives of Japan” Hans Günter Brauch, Ürsula Oswald Spring, John Grin, Czeslaw Mesjasz, Patricia Kameri-Mbote, Navnita Chadha Behera, Béchir Chourou, and Heinz Krummenacher (eds.), *Facing Global Environmental Change: Environmental, Human, Energy, Food, Health and Water Security Concepts* (Springer), pp. 1097-1104, 2009
- 篠田英朗「平和構築における現地社会のオーナーシップの意義」、『広島平和科学』31号、163-202頁、2009年
- 篠田英朗「ウッドロー・ウィルソン—介入主義、国家主権、国際連盟」、遠藤乾（編）『グローバルガバナンスの歴史と思想』（有斐閣）、81-108頁、2010年
- 篠田英朗「平和構築における二つの SSR：安全保障と開発援助の SSR をめぐる交錯」、上杉勇司、長谷川晋（編）『平和構築と治安部門改革（SSR）—開発と安全保障の視点から—』、IPSHU 研究報告シリーズ No. 45、29-40 頁、2010 年
- Hideaki SHINODA and Ajith BALASSORIYA “The ‘Responsibility to Protect’ at the End of Conflict: The Role of the International Community in Post-Conflict Peacebuilding in Sri Lanka”, *Hiroshima Peace Science* 32, pp. 1-25, 2010
- 篠田英朗「平和構築における現地社会オーナーシップ原則の歴史的・理論的・政策的再検討」、『広島平和科学』32号、1-25頁、2010年
- Hideaki SHINODA “Politics of Peace Processes in Sri Lanka: Reconsidered from Domestic, International and Regional Perspectives”, Hideaki SHINODA (ed.), *Peacebuilding in South Asia: Challenges and Opportunities*, IPSHU English Research Report Series No. 25, pp. 129-155, 2011
- 篠田英朗「法の支配」、藤原帰一、大芝亮、山田哲也（編）『平和構築入門』（有斐閣）、153-172頁、2011年
- 篠田英朗「平和構築における現地社会のオーナーシップと国家建設のジレンマ：シエラレオネとスリランカの事例を中心に」、『広島平和科学』33号、137-159頁、2011年
- Hideaki SHINODA “The Sri Lankan Model of Peacebuilding? The Principle of Local Society’s Ownership and the Validity of Developmental Authoritarianism”, Hideaki SHINODA (ed.), *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sri Lanka*, IPSHU English Research Report Series No. 26, pp. 2-19, 2012
- Hideaki SHINODA “The Sierra Leonean Model of Peacebuilding? The Principle of Local Society’s Ownership and Liberal Democracy in Africa”, Hideaki SHINODA (ed.), *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sierra Leone*, IPSHU English Research Report Series No. 27, pp. 2-22, 2012
- Hideaki SHINODA “The Principle of Local Ownership as a Bridge between International and Domestic Actors in peacebuilding”, Bertha Z. OSEI-HWEDIE,

Treasa GALVIN and Hideaki SHINODA (eds.), *Indigenous Methods of Peacebuilding in Africa*, IPSHU English Research Report Series No. 29, pp. 66-87, 2012

篠田英朗「日本の近代国家建設と紛争後平和構築～東北に着目して～」、篠田英朗、淵ノ上英樹『平和構築としての日本の近代国家建設：研究序論』、IPSHU 研究報告シリーズ No.47、2-58 頁、2012 年

篠田英朗「安全保障と開発支援の観点から見た二つの SSR」、上杉勇司、藤重博美、吉崎知典（編）『平和構築における治安部門改革』（国際書院）、49-65 頁、2012 年

Reuben LEWIS and Hideaki SHINODA “Operationalizing Early Warning for Conflict Prevention and Peacebuilding in West Africa: A Case Study of ECOWAS Early Warning System”, *Hiroshima Peace Science* 34, pp. 1-32, 2012

< 学会等報告 >

「立憲主義と国際秩序」、日本国際政治学会 2008 年度研究大会、つくば国際会議場、2008 年 10 月 25 日

“Human Rights, Democracy and Peace in Universal International Society” Carnegie/ Uehiro/ Oxford Conference on Human Rights, Democracy, and Democratization, Carnegie International Endowment for Peace, New York, November 12, 2009

“Japanese Contributions to Nation-building and Peace-building”, The Evolution of Japan’s Defense Posture, French Institute of International Relations, Paris, April14, 2010

“The Principle of Local Ownership as a Bridge between International Standards and Indigenous Methods in Peacebuilding”, Conference on Indigenous Methods of Conflict Resolution and Peace Building, Centre for Culture and Peace Studies, University of Botswana, Gaborone, September 23, 2010

“The Significance of Local Ownership in Peacebuilding: From Respect to Strategic Development”, 2011 Annual Convention, International Studies Association, Montreal, March 18, 2011

「平和構築と国際秩序～立憲主義と国家主権：平和構築における法の支配アプローチの分析～」、日本国際政治学会 2011 年度研究大会、つくば国際会議場、2011 年 11 月 11 日

「平和構築における現地社会のオーナーシップ原則の再考～国家建設とコミュニティ再建、そして日本の近代化と東北～」、日本平和学会 2012 年度春季研究大会、沖縄大学、2012 年 6 月 23 日

●川野徳幸（2009 年 10 月～2013 年 5 月准教授、2013 年 6 月教授）

< 編著書 >

川野徳幸（編）、『大北威寄贈資料目録（原爆関連資料）』、IPSHU 研究報告シリーズ No.44、2010 年

川野徳幸「米ソ冷戦構造の負の遺産ーセミパラチンスクの核実験場周辺の被曝問題ー」、
『朝倉世界地理講座 5 中央アジア』、201-212 頁、朝倉書店、2012 年

川野徳幸、今中 哲二、竹内 高明（編）、『チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタ
ビュー記録』、IPSHU 研究報告シリーズ No.46、2012 年

川野徳幸、今中哲二（編）、『ある「広島原爆早期入市者」の記録』、IPSHU 研究報告シリ
ーズ No.48、2013 年

<学術論文>

原田結花、原田浩徳、川野徳幸、木村昭郎「被ばく MDS/AML の分子発症メカニズム」、
放射線生物研究 44 (2)、431-446 頁、2009 年

Tetsuji IMANAKA and Noriyuki KAWANO, “Radioactive Contamination and Social
Consequences Caused by the Chernobyl Nuclear Accident”, *Hiroshima Peace Science*
31, pp. 65-86, 2009

川野徳幸、大谷敬子、佐藤健一、富田哲治、大瀧慈、「原爆被爆者の不安度における被爆
状況依存性についてー朝日新聞社アンケート調査に基づく解析ー」、『広島医学』63 巻 4
号、270-274 頁、2010 年

川野徳幸「原爆被爆被害の概要、そして原爆被爆者の思い」、日本平和学会（編）『平和研
究』35 号、19-38 頁、早稲田大学出版部、2010 年<依頼原稿>

川野徳幸、佐藤健一、大瀧慈「原爆被爆者は何を伝えたいのかー原爆被爆者の体験記・メ
ッセージの計量解析を通してー」、『長崎医学会雑誌』85 巻特集号、208-213 頁、2010
年

川野徳幸、大瀧慈、岡田高旺「広島原爆投下後の爆心地付近における延焼状況の視覚化」、
『広島平和科学』32 号、107-128 頁、2010 年

Noriyuki KAWANO, Megu OHTAKI, and Takao OKADA, “Mapping the Fire Field near
the Hypocenter of the Hiroshima A-bomb,” Michio AOYAMA and Yutaka OUCHI
(eds.), *Revisit The Hiroshima A-bomb with a Database Latest Scientific View on
Local Fallout and Black Rain*, pp. 15-24, Hiroshima City, 2011

Michio AOYAMA, Noriyuki KAWANO, Toshio KOIZUMI, Takao OKADA, Yoshihiro
OKADA, Megu OHTAKI, and Takahiro Tanikawa, “Estimation of heat, water, and
black carbon fluxes during the fire induced by the Hiroshima A-bomb”, Michio
AOYAMA and Yutaka OUCHI (eds.), *Revisit The Hiroshima A-bomb with a Database
Latest Scientific View on Local Fallout and Black Rain*, pp. 43-54, Hiroshima City,
2011

池田佳代、川野徳幸「グアム統合軍事開発計画の人種政治的側面に関する考察ーグアム島
公共水道システムを事例にー」、『広島平和科学』33 号、119-136 頁、2011 年

川野徳幸「チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への聞き取り調査備忘録：フクシマそして
原発を考えるためにも」、『広島平和科学』33 号、93-118 頁、2011 年

Tetsuji IMANAKA, Satoru ENDO, Noriyuki KAWANO, Kenichi TANAKA, “Radiation
exposure and disease questionnaires of early entrants after the Hiroshima
Bombing”, *Radiation Protection Dosimetry*, Vol. 149 No.1, pp. 91-96, 2012

- T. Muldagaliyev, M. Hoshi, R. Apsalikov, N. KAWANO, T. Belihina, “The scientific basis for the organization of health screening radiation-exposed population of Kazakhstan, the results of the analysis, design prenosological prevention and rehabilitation”, *Proceedings of the 17th Hiroshima International Symposium - Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development* -, IPSHU English Research Report Series No. 28, pp. 151-154, 2012
- HIRABAYASHI Kyoko, SATOH Kenichi, MULDAGALIYEV Talgat, APSALIKOV Kazbek, KAWANO Noriyuki, “Overall Image of Nuclear Tests among Inhabitants in the Semipalatinsk Area”, *Proceedings of the 17th Hiroshima International Symposium - Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development* -, IPSHU English Research Report Series No. 28, pp. 155-162, 2012
- Michio Aoyama, Noriyuki KAWANO, Toshio Koizumi, Takao Okada, Yoshihiro Okada, Megu Ohtaki and Takahiro Tanikawa, “Estimation of heat, water, and black carbon fluxes during the fire induced by the Hiroshima A-bomb in 1945”, *Proceedings of the 17th Hiroshima International Symposium - Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development* -, IPSHU English Research Report Series No. 28, pp. 18-24, 2012
- 川野徳幸、佐藤健一「原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被爆区分別特徴について」、『広島医学』65 巻 4 号、322-326 頁、2012 年
- 佐藤裕哉、佐藤健一、川野徳幸「キノコ雲はどこまで見えたかー被爆証言と地形データからのアプローチ」、『広島医学』65 巻 4 号、327-330 頁、2012 年
- 平林今日子、佐藤健一、大瀧慈、Talgat Muldagaliyev、Kazbek Apsalikov、川野徳幸「セミパラチンスク地区住民の核実験に起因する認識構造」、『長崎医学会雑誌』87 巻特集号、280-285 頁、2012 年
- 佐藤裕哉、佐藤健一、嶋本浩子、川野徳幸「地理情報システムを用いた被ばく証言・新聞記事による黒い雨の降雨の空間的考察」、『長崎医学会雑誌』87 巻特集号、181-185 頁、2012 年
- 川野徳幸「広島大学学生の前爆・原爆被害理解度に関する試論」、『広島平和科学』34 号、189-208 頁、2012 年
- 辛亨根、川野徳幸「韓国人原爆被害者研究の過程とその課題」、『広島平和科学』34 号、161-187 頁、2012 年
- 平林今日子、川野徳幸、Talgat MULDAGALIYEV、Kazbek APSALIKOV、大瀧慈「セミパラチンスク核実験場近郊住民の精神的影響、そしてその背景要因」、『広島平和科学』34 号、145-160 頁、2012 年
- 松浦陽子、佐藤健一、川野徳幸「広島の前爆と平和宣言を通して」、『広島平和科学』35 号、67-101 頁、2013 年
- 辛亨根・川野徳幸「韓国人被爆者問題をめぐる草の根交流」、『広島平和科学』35 号、103-128 頁、2013 年

川野徳幸「原爆体験と原爆被爆者の平和観」、国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会（広島県・広島市）（編）ひろしま復興・平和構築研究事業報告書『広島の復興経験を生かすために－廃墟からの再生－』、139-158 頁、2014 年

Kyoko HIRABAYASHI, Noriyuki KAWANO, Talgat MULDAGALIYEV, Kazbek APSALIKOV, “The psychological effects and their factors among inhabitants around the Semipalatinsk Nuclear Test Site: Results of questionnaires and interview surveys from 2002 until 2012” *Japanese Review of Political Society*, Vol. 2, pp. 7-19, 2014

Jaroslav KRASNY・Noriyuki KAWANO, “Weapons of Mass Destruction and the Principle of Unnecessary Suffering: The Use of Nuclear Weapons in an Armed Conflict”, *Hiroshima Peace Science* 36, pp. 101-116, 2014

松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸「長崎の平和観－長崎平和宣言頻出単語の解析を通して－」、『広島平和科学』36 号、75-100 頁、2014 年

Yoshiyuki Nakao, Akiyuki Jimura, and Noriyuki Kawano, Choice and Psychology of Negation in Chaucer’s Language: Syntactic, Lexical, Semantic Negative Choice with Evidence from the Hengwrt and Ellesmere MSs and the Two Editions of the Canterbury Tales, *HIROSHIMA STUDIES IN ENGLISH LANGUAGE AND LITERATURE*, 1-34, March 2015

<学会等報告>

「広島原爆早期入市者の疾病記録と誘導放射能による外部被曝量の評価」、日本放射線影響学会第 52 回大会、広島市南区民文化センター、2009 年 11 月 11 日－13 日

「チェルノブイリ原発事故被災者への聞き取り調査」、被ばく研究会、NHK 放送文化研究センター、2009 年 11 月 25 日

「原爆被爆者の「心の傷」・「差別」・「健康不安度」について」、放射線影響研究会、広島市まちづくり交流プラザ、2009 年 11 月 25 日

“An Outline of A-Bomb Damages and Mental Effects / Social discriminations on the Residents in Hiroshima and Nagasaki”, International Workshop on Chernobyl Health Consequences, Kiev Ukraine, December 15-17, 2009

「原爆被爆者は何を伝えたいのか－原爆被爆者の体験記・メッセージの計量解析を通して－」、第 51 回原子爆弾後障害研究会、長崎原爆資料館、2010 年 6 月 6 日

「旧ブリピャチ住民にとってチェルノブイリ原発事故とは何だったのか」、第 110 回原子力安全ゼミ研究会、京都大学原子炉実験所、2011 年 3 月 18 日

「チェルノブイリ原発事故とは何だったのか：旧ブリピャチ住民へのオーラルヒストリーを通して考える」、今語る、チェルノブイリ原発事故 25 周年（チェルノブイリ支援・広島医療協議会）、広島市まちづくり市民交流プラザ、2011 年 4 月 23 日

「原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被爆区分別特徴について」、第 52 回原子爆弾後障害研究会、ホテル八丁堀シャンテ（広島市）、2011 年 6 月 5 日

「キノコ雲はどこまで見えたか－被爆証言と地形データからのアプローチ－」、第 52 回原子爆弾後障害研究会、ホテル八丁堀シャンテ（広島市）、2011 年 6 月 5 日

- “Outlines of Atomic Bomb Afflictions in Hiroshima and Nagasaki”, CNAS-HiPeC5th Internal Seminar Jointly organized by CNAS-HiPeC, TU, Bishwa Bhasha Campus, UNRCPD and Nepal Tourism Board, Kathmandu, Nepal, July 29, 2011
- 「原発事故による社会基盤の崩壊：原発の町、プリピャチを事例に」、政治社会学会、同志社大学（京都）、2011年9月18日～19日
- 「チェルノブイリ・旧プリピャチ住民の社会基盤崩壊、そしてフクシマを通して原発を考える」、東京外国語大学国際関係研究所シンポジウム「みんなで話そう原発」、東京外国語大学、2012年1月21日 【招聘講演】
- 「広島原爆早期入市者の疾病記録と誘導放射能による被曝量の評価」、第46回京都大学原子炉実験所学術講演会（大阪府熊取町）、2012年2月2日～3日
- “Scientific foundations of screening organization of the state of health of Kazakhstanean population subjected to radiation, analyses of the results, development prenozological preventive measures and rehabilitation”, 17th Hiroshima International Symposium - Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development -, Hiroshima, January 25-26, 2012
- “Overall Image of Nuclear Tests among Inhabitants in the Semipalatinsk Area”, 17th Hiroshima International Symposium - Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development-, Hiroshima, January 25-26, 2012
- “Estimation of heat, water, and black carbon fluxes during the fire induced by the Hiroshima A-bomb in 1945”, 17th Hiroshima International Symposium – Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development -, Hiroshima, January 25-26, 2012
- 「セミパラチンスク地区住民の核実験に起因する認識構造」、第53回原子爆弾後障害研究会、長崎原爆資料館、2012年6月3日
- 「地理情報システムを用いた被ばく証言・新聞記事による黒い雨の降雨の空間的考察」、第53回原子爆弾後障害研究会、長崎原爆資料館、2012年6月3日
- “Choice and Psychology of Negation in Chaucer’s Language: Syntactic, Lexical, Semantic Negative Choice with Evidence from the Hengwrt and Ellesmere MSs and the Two Editions of *the Canterbury Tales*”, The 18th Congress of the New Chaucer Society, Portland, Oregon, USA, July 23, 2012
- 「戦争体験継承への可能性 現在の戦争の状況」、平和を考えるシンポジウム（鳥取県主催）、鳥取県琴浦町生涯学習センター、2012年10月21日【招聘講演】
- 「セミパラチンスク核実験場近郊住民の心的影響とその要因」、政治社会学会、国際基督教大学（三鷹市）、2012年11月23日～25日
- 「平和学における「平和概念」、国際平和のための世界経済人会議、ピース・アーチ・ひろしま（広島県が中心）、広島国際会議場、2013年7月31日
- 「経時的テキストデータにおける出現パターンの抽出と分類」、2013年度統計関連学会連合大会、大阪大学豊中キャンパス、2013年9月9日
- 「チョーサーの写本と刊本の比較」、広島大学ヨーロッパ中世研究会、広島、2014年1月

31 日

“A Computer-assisted Textual Comparison among the Manuscripts and the Editions of *The Canterbury Tales*: With Special Reference to Caxton’s Editions”, The 19th Congress of the New Chaucer Society, Reykjavik, Iceland, July 18, 2014

「原爆体験と原爆被爆者の平和観」、ひろしま復興・平和構築研究事業発表会（広島県主催）、広島県情報プラザ（広島市）、2014 年 10 月 11 日

「「ヒロシマ」という思想 そして、これからの「ヒロシマ」」、国際シンポジウム『混沌とする世界における国際機関の強化—広島の果たす役割は—』（広島大学平和科学研究センター／新潟県立大学共催）、広島国際会議場、2014 年 11 月 21 日

「核の脅威：原爆被爆被害を通して」、日本物理学会 第 70 回年次大会、早稲田大学、2015 年 3 月 22 日

<表彰>

第 13 回（平成 26 年度）広島大学学長表彰

●友次晋介（2014 年 4 月准教授）

<編著書>

友次晋介、小倉亜紗美（責任編集）、『広島大学平和科学研究センター/新潟県立大学共催国際シンポジウム「混沌とする世界における国際機関の強化—ヒロシマの果たす役割は—」』、IPSHU 研究報告シリーズ No.51、2015 年

<学術論文>

友次晋介「医療保険外交の一里塚としての「アジア医療機構構想」 - 政治過程・教訓・遺産に関する一考察 - 」、『広島平和科学』36 号、61-73 頁、2014 年

<学会等報告>

“Decolonization and the United Kingdom’s Atoms for Peace Program in the Middle East”, The Society for Historians of American Foreign Relations (SHAFR) 2014 Annual meeting, Lexington USA, June 19, 2014

“From Hiroshima to Fukushima: The Evolution of Japan’s Nuclear Posture”, Japan-America Society of the State of Washington, Seattle, WA, USA, February 28, 2015

“From Hiroshima to Fukushima: The Evolution of Japan’s Nuclear Policy” East West Center, Washington D.C. USA, March 3, 2015

●小倉亜紗美（2014 年 4 月助教）

<編著書>

友次晋介、小倉亜紗美（責任編集）、『広島大学平和科学研究センター/新潟県立大学共催国際シンポジウム「混沌とする世界における国際機関の強化—ヒロシマの果たす役割は—」』、IPSHU 研究報告シリーズ No.51、2015 年

< 学術論文 >

小倉亜紗美「【研究ノート】短期留学プログラムを通じた広島大学「平和教育」の試み」、
『広島平和科学』36号、117-126頁、2014年

< 学会等報告 >

「マレーシア・ボルネオ島における地域住民参加による熱帯雨林再生活動を通じた ESD
の試み」、第25回日本環境教育学会、法政大学、2014年8月2日

「広島地区の ESD の取り組みと平和学」、ESD シンポジウム「ESD の10年と地域の取
り組み」、公益財団法人日本マレーシア教会/中国放送（平和科学研究センター共催—第
200回平和科学研究センター研究会）、広島市南区民文化センター、2014年11月22日

< 受賞 >

平成26年度広島大学女性研究者奨励賞受賞

(7) 研究費等の採択状況（2008年度～2014年度）

【研究代表者】

2008年度

松尾雅嗣 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「原爆文学関連自筆資料の目録
作成と電子画像化の研究」（直接経費320万円）

篠田英朗 平成20年度外務省委託「平和構築分野の人材育成のためのパイロット事業」
（直接経費17,100万円【再委託契約額を含む】）

2009年度

篠田英朗 平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)「平和構築における現地社会の
オーナーシップ育成の課題」（直接経費680万円）

篠田英朗 平成21年度外務省委託「平和構築人材育成事業」（直接経費1,370万円）

川野徳幸 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「セミパラチンスク地区の核被
害実態調査研究：アンケート・証言・遺伝子解析を通して」（直接経費360万円）

川野徳幸 平成20-21年度広島大学地域貢献発展研究「原爆被ばく資料の収集・整理・目
録作成・電子画像化の研究及び広島市平和行政に関するオーラル・ヒストリー」（425
万円）

2010年度

篠田英朗 平成22年度外務省委託「平和構築人材育成事業」（直接経費663万円）

2011年度

篠田英朗 平成23年度外務省委託「平和構築人材育成事業」（直接経費334万円）

川野徳幸 平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(B)「カザフスタン共和国セミパ
ラチンスク地区住民の被ばく被害に関する総合的研究」（直接経費1050万円）

2012 年度

篠田英朗 平成 24 年度外務省委託「平和構築人材育成事業」（直接経費 820 万円）

2014 年度

友次晋介 平成 26 年度公益財団法人村田学術振興財団・研究者海外派遣援助「脱植民地化と英国の対中東原子力協力」（22 万円）

小倉亜紗美 平成 26 年度広島大学女性研究者奨励賞受賞（26.8 万円）

【研究分担者】

2008 年度

松尾雅嗣 平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「コンピュータによる『カンタベリー物語』Hg, El 写本及び刊本の言語比較」研究代表者：中尾佳行

小柏葉子 平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「アジアにおける実践を通じた「差異化」克服の理論構築：平和協力への「もう一つの道」」研究代表者：吉村修

2009 年度

小柏葉子 平成 21-23 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「移民外国人の社会統合問題をめぐる地域間比較研究：「内包」と「排除」の議論を超えて」研究代表者：河原祐馬

川野徳幸 平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（海外調査）「セミパラチンスク核実験場周辺住民の被ばく線量評価と低線量・低線量率被ばくリスク」
研究代表者：星正治

川野徳幸 平成 21-23 年度科学研究費補助金基盤研究（A）「原爆被爆者の後障害に関する社会医学的研究」研究代表者：大瀧慈

2011 年度

川野徳幸 平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「カザフスタンのセミパラチンスク核実験場やウラン鉱山地域の被ばく線量評価と健康影響」研究代表者：星正治

川野徳幸 平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「広島における核・被ばく学研究基盤の形成に関する研究」研究代表者：小池聖一

川野徳幸 平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「コンピュータを使った『カンタベリー物語』Hg, El 写本及び刊本の言語比較」研究代表者：中尾佳行

2012 年度

川野徳幸 平成 24-26 年度科学研究費補助金基盤研究（A）「若齢期放射線被曝による晩発障害に関する社会医学的研究」研究代表者：大瀧慈

川野徳幸 平成 24-26 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「コンピュータによる『カンタベリー物語』諸写本とキャクストン版の計量的比較」研究代表者：地村彰之

2014 年度

川野徳幸 平成 26-29 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 「カザフ核実験場周辺住民の放射性降下物の実態解明－線量評価及び健康影響解析－」研究代表者：星正治

川野徳幸 平成 26-29 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「世界の核災害における後始末に関する調査研究」研究代表者：今中哲二

川野徳幸 平成 26-28 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「広島における核・被ばく学研究基盤の拡充に関する研究」研究代表者：小池聖一

川野徳幸 平成 26-28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「コンピュータを使った『カンタベリー物語』Hg, El 写本及び刊本の比較と分析」研究代表者：中尾佳行

3-2 教育活動

センター専任研究員は、大学院及び学部教育に携わっている。大学院国際協力研究科では、博士課程前期、後期で指導し、「平和学」、「グローバル社会地域協力論」、「平和構築論」「国際安全保障論」、「平和共生演習」、「平和共生演習Ⅰ」、「平和共生演習Ⅱ」、「国際関係特論（日・英）」（分担）等を担当している。

学部では総合科学部で、「平和学」、「紛争解決論」、「地域協力政策論」等を担当している。また、教養教育では平和科目を担当している。2008 年度以降の担当科目を以下に示す。

表. 平和科研教育活動：2008(H20) 年度～2014(H26) 年度（広島大学関係のみ）

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2008 (平成 20)	国際協力研究科	平和学	松尾雅嗣	60
		グローバル社会地域協力論	小柏葉子	60
		平和構築論	篠田英朗	60
		平和共生演習	松尾雅嗣	60
			小柏葉子	60
			篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅰ	松尾雅嗣	60
			篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅱ	松尾雅嗣	60
			篠田英朗	60
		国際関係特論	松尾雅嗣	2
			小柏葉子	2
			篠田英朗	2
		International Relations	松尾雅嗣	2
			小柏葉子	2
			篠田英朗	2
2009 (平成 21)	国際協力研究科	グローバル社会地域協力論	小柏葉子	60
		平和構築論	篠田英朗	60
		平和共生演習	小柏葉子	60
			篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
		国際関係特論	小柏葉子	2
			篠田英朗	2
		International Relations	小柏葉子	2
			篠田英朗	2
	総合科学部	地域協力政策論	小柏葉子	30

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2010 (平成 22)	国際協力研究科	平和構築論	篠田英朗	60
		平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
		国際関係特論	篠田英朗	2
			川野徳幸	2
		International Relations	篠田英朗	2
			川野徳幸	2
	総合科学部	紛争解決論	篠田英朗	30
2011 (平成 23)	国際協力研究科	平和構築論	篠田英朗	60
		平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		国際関係特論	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
		International Relations	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
	総合科学部	平和学	川野徳幸	30
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2012 (平成 24)	国際協力研究科	平和構築論	篠田英朗	60
		平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		国際関係特論	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
		International Relations	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
2013 (平成 25)	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4
	国際協力研究科	平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	川野徳幸	60
		国際関係特論	川野徳幸	4
		International Relations	川野徳幸	4
	総合科学部	平和学	川野徳幸	30
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4
2014 (平成 26)	たおやか（国際協力研究科）	平和と安全	西田恒夫	30
		恒久的平和と文化	木曽功	30
	国際協力研究科	平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	川野徳幸	60
		国際関係特論	川野徳幸	4
		International Relations	川野徳幸	4
			友次晋介	4
	総合科学部	平和学	川野徳幸	30
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4

4. 社会活動

専任研究員は、広島市「原爆による放射性降下物等の実態検証委員会」委員、広島県「ひろしま復興・平和構築研究編集委員会」委員等を務めたほか、朝日新聞社、読売新聞と共同で被爆者アンケート調査を実施し、社会貢献に努めている。同時にそれぞれの専門において、新聞、TV 等で有識者としてのコメントを求められることも多々あり、研究成果を社会に還元している。

この他、修学旅行時に広島へ訪れた中高生の平和教育も実施している。

<平和関連機関との国際ネットワーク構築事業>

2014 年度より、より国際的・普遍的な平和研究の知の拠点づくりを促進し、平和研究分野での広島大学の国際的プレゼンスを確立するための基盤を整備することを目的として、海外の平和関連機関との研究交流等、ネットワーク構築事業を展開している。

各専任研究員の学会や社会への主な貢献は次のとおりである。

●松尾雅嗣

財団法人広島平和文化センター評議員

●小柏葉子

国立民族博物館共同研究会研究員

●篠田英朗

日本平和学会理事・企画委員

JICA 主催の各種研修事業（2006 年度・2009 年度）

外務省招聘イラク外交官セミナー研修講師（2008 年）

●川野徳幸

NGO ヒロシマ・セミパラチンスク・プロジェクト 顧問

第 2 回カザフスタン・市民交流会「カザフスタンの医師 広島と旧ソ連の核を語る」のコーディネーター（2010 年 7 月）

第 19 回全国ボランティアフェスティバルひろしま・分科会 20「語り継ぐボランティアたち～未来の子どもたちのために～」のコーディネーター（2010 年 9 月）

広島市「原爆による放射性降下物等の実態解明に関する検討会」委員（2009 年度）

広島市「原爆による放射性降下物等の実態検証委員会」委員（2010 年度～）

政治社会学会理事（2010 年 11 月～）

ひろしま復興・平和構築研究編集委員（広島県）（2012 年度～）

ひろしま平和研究・教育機関ネットワーク委員（広島県）（2013 年度～）

飯舘村放射能エコロジー研究会 福島シンポジウム「福島原発事故が飯舘村にもたらしたもの」、総合司会（2012 年 11 月）

読売新聞調査「被爆者意識調査」2010年以降毎年実施

朝日新聞調査「被爆60年アンケート調査」、「被爆65年アンケート調査」「被爆70年アンケート調査」

●小倉亜紗美

NPO 法人瀬戸内里海振興会理事

西条・山と水の環境機構運営委員

エコネットひがしひろしま幹事

東広島市立三ツ城小学校 4年生授業（2014年9月）

廿日市市立玖島小学校 全校授業（2014年10月）

広島大学附属高等学校 2年生授業－ESD実習（2014年11月、12月）

5. センタースタッフ

5-1 歴代センター長

1975年7月25日～79年3月31日	関 寛治
1979年4月1日～83年3月31日	栗野 鳳
1983年4月1日～85年3月31日	式部 久
1985年4月1日～88年3月31日	山田 浩
1988年4月1日～91年3月31日	森 祐二
1991年4月1日～93年3月31日	高橋史樹
1993年4月1日～94年3月31日	山下彰一
1994年4月1日～2002年3月31日	松尾雅嗣
2002年4月1日～2004年3月31日	中山修一
2004年4月1日～2008年3月31日	松尾雅嗣
2008年4月1日～2010年3月31日	川崎信文
2010年4月1日～2012年3月31日	星 正治
2012年4月1日～2013年12月31日	上 真一
2014年1月1日～2014年3月31日	坂越正樹
2014年4月1日～	西田恒夫

5-2 センタースタッフ (2015年度)

センター長	特任教授	西田恒夫
専任研究員	特任教授	木曾 功
	教授	川野徳幸
	准教授	友次晋介
	助教	小倉亜紗美

<運営委員>

西田 恒夫：平和科学研究センター
布川 弘：大学院総合科学研究科
越智 貢：大学院文学研究科
下向井龍彦：大学院教育学研究科
星野 一郎：大学院社会科学研究科
安倍 学：大学院理学研究科
中野 宏幸：大学院生物圏科学研究科
小池 聖一：大学院国際協力研究科
篠崎 賢二：大学院工学研究院

神谷 研二：原爆放射線医科学研究所
木曾 功：平和科学研究センター
川野 徳幸：平和科学研究センター
友次 晋介：平和科学研究センター

<兼任研究員>

材木 和雄：総合科学研究科 教授
布川 弘：総合科学研究科 教授
町田 宗鳳：総合科学研究科 教授
吉村慎太郎：総合科学研究科 教授
西 佳代：総合科学研究科 准教授
越智 貢：文学研究科 教授
池野 範男：教育学研究科 教授
倉地 曉美：教育学研究科 教授
川崎 信文：社会科学研究科 教授
中坂恵美子：社会科学研究科 教授
西谷 元：社会科学研究科 教授
森邊 成一：社会科学研究科 教授
吉田 修：社会科学研究科 教授
千代章一郎：工学研究院 准教授
山尾 政博：生物圏科学研究科 教授
小池 聖一：国際協力研究科 教授
中園 和仁：国際協力研究科 教授
マハラジャン・ケシャブ・ラル：国際協力研究科 教授
関 恒樹：国際協力研究科 准教授
外川 雅彦：国際協力研究科 准教授
山根 達郎：国際協力研究科 准教授
大瀧 慈：原爆放射線医科学研究所 教授

<客員研究員>

井竿 富雄：山口県立大学
石井 修：一橋大学名誉教授
市川ひろみ：京都女子大学
今中 哲二：京都大学
岩田 賢二：広島大学名誉教授
上杉 勇司：早稲田大学
植村 泰夫：広島大学名誉教授
遠藤 誠治：成蹊大学
片山 和則：朝日大学

柄谷利恵子：関西大学
吉川 元：広島市立大学
小林 文男：広島大学名誉教授
佐竹 眞明：名古屋学院大学
佐藤 幸男：富山大学名誉教授
澤田 眞治：防衛大学校
篠田 英朗：東京外国語大学
高原 孝生：明治学院大学
竹内 常善：広島大学名誉教授
土佐 弘之：神戸大学
初瀬 龍平：神戸大学名誉教授
林 忠行：京都女子大学
平岡 敬：元広島市長
藤原 修：東京経済大学
淵ノ上英樹：立命館アジア太平洋大学
星 正治：広島大学名誉教授
三上 貴教：広島修道大学
宮脇 昇：立命館大学
村上登司文：京都教育大学
村田 晃嗣：同志社大学
毛利 聡子：明星大学
山下 明博：安田女子大学
山下 彰一：広島大学名誉教授/復旦大学顧問教授
山田 康博：大阪大学
ロニー・アレキサンダー：神戸大学
カズベック・アプサリコフ：カザフスタン放射線医学環境研究所
グレン・フック：シェフィールド大学
ナヤニ・メレゴダ：コロンボ大学
デズモンド・モロイ：東京外国語大学
メムナツ・プラット：シエラレオネ大学
ジャクシバイ・ズーマジロフ：ナザルバエフ大学

<顧問>

明石 康：日本紛争予防センター
岡本 三夫：広島修道大学名誉教授
深瀬 忠一：北海道大学名誉教授（2015年10月ご逝去）

6. 2008-2015 年度 平和科学研究センター予算

		基盤経費		
経理単位名		平和科学研究センター運営費		合計
予算科目名		附属施設研究経費及び管理的経費	広報関係経費	
2008 年度	当初予算額	2,744,000	67,000	2,811,000
	前年度決算配分	293,096	0	293,096
	計	3,037,096	67,000	3,104,096
2009 年度	当初予算額	2,704,000	66,000	2,770,000
	前年度決算配分	△ 225,983	0	△ 225,983
	計	2,478,017	66,000	2,544,017
2010 年度	当初予算額	2,664,000	65,000	2,729,000
	前年度決算配分	297,561	0	297,561
	計	2,961,561	65,000	3,026,561
2011 年度	当初予算額	2,625,000	64,000	2,689,000
	前年度決算配分	786,236	0	786,236
	計	3,411,236	64,000	3,475,236
2012 年度	当初予算額	2,586,000	63,000	2,649,000
	前年度決算配分	993,542	0	993,542
	計	3,579,542	63,000	3,642,542
2013 年度	当初予算額	2,488,000	62,000	2,550,000
	前年度決算配分	1,352,202	0	1,352,202
	計	3,840,202	62,000	3,902,202
2014 年度	当初予算額	2,270,000	61,000	2,331,000
	前年度決算配分	△ 800,605	0	△ 800,605
	計	1,469,395	61,000	1,530,395
2015 年度	当初予算額	2,223,000	60,000	2,283,000
	前年度決算配分	188,021	0	188,021
	計	2,411,021	60,000	2,471,021
2015 年度 平和関連機関との国際ネットワーク構築事業(学長裁量経費)				10,000,000

※執行留保分…学内の財務状況の適正化及び予算の効率的執行等を図ることを目的に、部局の共通予算（各部局等支援室で管理している予算）の決算残の状況を踏まえたうえで、部局総枠予算の一部（△5.0%）が執行留保されるもの。

「部局の決算残の状況を踏まえ」の意は、前々年度決算時に決算残がある場合という意味。すなわち、前々年度に決算残がなければ執行留保対象部局にはならない。なお、部局に配分された予算に不足が生じた場合には、各部局の執行計画に基づき、学内補正予算の編成過程において執行留保が解除されるもの。

別紙 1. 広島大学平和科学研究センター規則

(平成 16 年 4 月 1 日規則第 45 号)

改	平成 18 年 3 月 31 日規則第 76 号	平成 19 年 3 月 13 日規則第 34 号
正	平成 20 年 3 月 11 日規則第 38 号	平成 20 年 3 月 31 日規則第 124 号
	平成 22 年 3 月 31 日規則第 65 号	平成 23 年 3 月 31 日規則第 75 号
	平成 24 年 3 月 13 日規則第 11 号	平成 24 年 6 月 7 日規則第 109 号
	平成 26 年 3 月 11 日規則第 13 号	

広島大学平和科学研究センター規則

(趣旨)

第 1 条 この規則は、広島大学学則(平成 16 年 4 月 1 日規則第 1 号)第 18 条の規定に基づき、広島大学平和科学研究センター(以下「センター」という。)の管理運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第 2 条 センターは、広島大学(以下「本学」という。)の学内共同教育研究施設として、平和科学に関する研究・調査及び資料の収集を行うことを目的とする。

(組織)

第 3 条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任教員
- (3) その他必要な職員

2 センターに、前項に掲げるもののほか、研究員又は客員研究員を置くことができる。

第 4 条 センター長は、本学専任の教授をもって充てる。

2 センター長は、教育・国際室センター等推進部門(以下「推進部門」という。)の意見を聴いて、学長が任命する。

3 センター長は、推進部門の助言によりセンターの業務を掌理する。

4 センター長の任期は、2 年とし、再任を妨げない。

5 センター長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任者の任期は、その任命の日から起算して 1 年を経過した日の属する年度の末日までとする。

第 5 条 削除

第 6 条 センターの専任教員は、役員会の議を経て、学長が任命する。

第 7 条 研究員は、本学の教員をもって充てる。

2 研究員は、推進部門の意見を聴いて、学長が任命する。

3 客員研究員は、学外の研究者をもって充てる。

4 客員研究員は、推進部門の意見を聴いて、学長が委嘱する。

5 研究員及び客員研究員の任期は、2 年とする。ただし、4 月 2 日以降に任命又は委嘱された場合の任期は、その任命又は委嘱の日から起算して 1 年を経過した日の属する年度の末日までとする。

6 研究員及び客員研究員の再任は、妨げない。

(顧問)

第 8 条 センターに、顧問を置くことができる。

2 顧問は、センターの長期的・一般的な研究計画について意見を述べることができる。

3 顧問は、学識経験者のうちから、次条に定める広島大学平和科学研究センター運営委員会の意見を聴いて、学長が任命又は委嘱する。

4 顧問の任期は、2 年とする。ただし、4 月 2 日以降に委嘱された場合の任期は、その委嘱の日から起算して 1 年を経過した日の属する年度の末日までとする。

5 顧問の再任は、妨げない。

(運営委員会)

第 9 条 センターに、広島大学平和科学研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

第 10 条 運営委員会は、次に掲げる委員で組織する。

(1) センター長

(2) 大学院総合科学研究科，大学院文学研究科，大学院教育学研究科，大学院社会科学研究科，大学院理学研究科，大学院生物圏科学研究科，大学院国際協力研究科，大学院工学研究院及び原爆放射線医科学研究所が，それぞれその教授又は准教授のうちから推薦する者 1 人

(3) センターの専任教員(教授及び准教授に限る。)

(4) 学長が必要と認めた者若干人

2 委員は、学長が任命する。

3 第 1 項第 2 号及び第 4 号の委員の任期は、2 年とし、4 月 1 日に任命することを常例とする。ただし、4 月 2 日以降に任命された場合の任期は、その任命の日から起算して 1 年を経過した日の属する年度の末日までとする。

4 第 1 項第 2 号及び第 4 号の委員の再任は、妨げない。

第 11 条 運営委員会は、センターに関し次に掲げる事項を審議する。

(1) 管理運営の基本方針(教員人事・予算の原案作成等を含む。)に関すること。

(2) 事業計画に関すること。

(3) その他センターの運営に関すること。

第 12 条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員が、その職務を代行する。

第 13 条 運営委員会は、必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(運営支援)

第 14 条 センターの運営支援は、教育・国際室国際交流グループにおいて行う。

(雑則)

第 15 条 この規則の定めるもののほか、この規則の実施に関し必要な事項は、センターが定める。

附 則

- 1 この規則は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 センターは、平成 30 年 3 月 31 日まで存続するものとし、平成 29 年度までにその存続の見直しを行う。
- 3 この規則の施行後最初に任命されるセンター長については、旧広島大学平和科学研究センター規程(昭和 50 年広島大学規程第 42 号。以下「旧センター規程」という。)において任命された者をこの規則により任命されたものとみなす。
- 4 この規則の施行後最初に任命される副センター長については、旧センター規程において任命された広島大学平和科学研究センター主任をこの規則により任命された副センター長とみなす。
- 5 この規則の施行の際現に研究員又は客員研究員である者の任期は、第 7 条第 5 項本文の規定にかかわらず、なお従前の例による。
- 6 第 4 条第 4 項及び第 5 項の規定にかかわらず、当分の間、センター長の任期は 1 年とし、センター長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

附 則(平成 18 年 3 月 31 日規則第 76 号)

この規則は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 19 年 3 月 13 日規則第 34 号)

この規則は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 20 年 3 月 11 日規則第 38 号)

この規則は、平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 20 年 3 月 31 日規則第 124 号)

この規則は、平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 22 年 3 月 31 日規則第 65 号)

この規則は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 23 年 3 月 31 日規則第 75 号)

この規則は、平成 23 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 24 年 3 月 13 日規則第 11 号)

この規則は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 24 年 6 月 7 日規則第 109 号)

- 1 この規則は、平成 24 年 6 月 7 日から施行し、この規則による改正後の広島大学平和科学研究センター規則の規定は、平成 24 年 4 月 1 日から適用する。

- 2 この規則の施行の際現に顧問である者の任期は、この規則による改正後の広島大学平和科学研究センター規則第8条第4項の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

附 則(平成26年3月11日規則第13号)

この規則は、平成26年4月1日から施行する。

Ⅱ.外部評価委員会における外部評価委員との意見交換

1. センター長あいさつ

直前で無理なお願いにも関わらず、外部評価委員会をお引き受けいただきましてありがとうございます。これから、約 2 時間を想定しておりますが、当センターの過去 8 年間の活動につきましてご報告をさせていただいて、先生方の忌憚のない評価につながるような議論をさせていただければと思っております。

前半では、川野先生を中心にしてわれわれのほうから当センターの活動について説明させていただき、後半では各委員の先生方からのご質問やコメント等をいただき、質疑応答をするというような予定を考えております。しかし、あくまで予定ですので、説明の途中でもご質問していただき、活発な評価をしていただければと思っております。

私自身は、センター長の職を拝受いたしましてから、もうすぐ 2 年でございます。まったく違った分野で 40 年仕事をしてきた後で、いろいろなご縁がありまして、お話をいただきました。私はここに常駐していないものですから、平均しまして 2 カ月に 3 回、多いときで 1 カ月に 2 回ぐらいの頻度で通ってきております。

センターは、川野先生をはじめ、今は常勤 4 人の体制でございます。これにセンター長の私ともう一人、文部科学省出身で元ユネスコ大使の木曾功先生に特任教授として来ていただいております。

詳細は川野先生から説明をさせていただきますが、私が来ましてこの 2 年間での業務について二つ申し上げたいことがあります。一つは、皆さん、特に事務の方の仕事量が倍くらいになったのではないかとこの点です。質は皆さんの評価を受けなくてはいけないのですが、少なくとも量的には、仕事、業務というか活動のレベルは、この 2 年間ぐらいで急に増えたのではないかと自負しております。

そのような活動を、さらに 5 年、10 年と、センターのみならず、広島大学という広いキャンパスの中において、よりきちんとしたかたちで、整合性の取れたものとして活動化していければと思っております。

二つ目は、もちろん、いわゆる研究機関としてのセンター、そのようななどの機関においても、共通な活動は基本的には、教育あるいは研究、それから社会的な活動等々で、開かれたセンターを目指してやると同時に、それを踏まえて 21 世紀グローバリゼーションの大学ということもあり、やはりネットワークをグローバルに構築していきたいと考えております。

それに加え、センターとしてのある種の存在感と言いましょいか、広島大学にセンターありということを示すために、そういう意味での広報宣伝活動をやっていききたいと考えております。具体的には、先ほど川野先生がお話ししましたホームページや、ニューズレター、後ほどご説明があると思いますがシンポジウム、研究会等々も、かなり頻繁かつ定期的に行うようにしております。

そして、このような活動を通じて、広島がこれまで 70 年間にわたって頑張ってきた、非核・核廃絶・軍縮というものをきちんと踏まえながら、もう少し幅広い視点から平和を考えるといったことを目指そうと考えております。そういう意味でのチームワーク、仲間をグローバルにつくっていききたいと思っています。

今日は、先生方におきましては、本当に忌憚のない率直なご意見、ご叱正^{しっせい}をいただければ、誠にありがたいと思っております。ぜひ、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

2. 外部評価委員会概要

日 時：2016 年 2 月 19 日（金）16:30-18:30

場 所：広島大学東千田キャンパス A405

出席者：

〔外部評価委員〕

高原孝生（明治学院大学国際平和研究所所長・国際学部教授）

水本和実（広島市立大学広島平和研究所副所長・教授）

布川弘（広島大学大学院総合科学研究科教授）

〔平和科学研究センター〕

西田恒夫センター長

川野徳幸教授

友次晋介准教授

小倉亜紗美助教

〔国際交流グループ〕

石野隆志 GL（グループリーダー）

式次第：

1. 西田センター長挨拶

2. 活動報告（川野）

①活動・目的・使命

②機構・運営

③研究活動

シンポジウム

研究会

紀要

研究報告シリーズ

専任研究員の研究活動

研究費等の採択状況

④教育活動

⑤社会活動

⑥2008-2015 年度 平和科学研究センター予算

⑦ネットワーク構築事業

⑧将来構想

3. 各委員との意見交換、各委員からの評価

研究活動、教育活動、社会活動、予算、ネットワーク構築事業及び将来構想のそれぞれの視点から

3. 各委員との意見交換、各委員からの評価の概要

<研究・教育・社会活動>

外部から見ると専任研究員（教員）は、研究に専念しているかのように見えるが、実際は教育もかなり担当し、その負担の大きさが理解できた。シンポジウム、研究会をはじめ、その他の研究成果を見る限り、現行の構成員の数で非常に努力していると言えよう。科学研究費などの外部資金も毎年採択され、評価に値する。今後も国際社会はもちろん、国内の学会や市民社会に対する発信を続けてほしい。教育の重要性は深く理解しながらも、平和科学科学研究センターが「研究センター」である限り、教育負担については軽減の方向で検討すべきなのではないか。

<予算>

事務経費しかなく、積極的な研究、そしてネットワーク構築事業など不可能だ。現行の予算の中でよくやっていると思うが、西田センター長を迎えた今、海外の平和関連研究施設とのネットワーク構築など積極的に展開すべきだ。持続的なネットワーク構築のためには、組織で繋がり、知名度を上げることが重要である。予算の増額については、最重要課題だと言えよう。

<ネットワーク構築事業>

豊富な外交経験を有す前国連大使・西田センター長を迎え、平和科学科学研究センターは、本事業を世界的に展開する好機である。これまで展開したネットワーク構築事業は非常に成功裏に行われている。今後、更に積極的に本事業を展開し、広島大学平和科学科学研究センターのプレゼンを高めてほしい。

<将来構想、その他>

資料にある「平和科学研究所」構想に全面的に賛成である。その実現のためにも現在のように教員が東広島と東千田を行き来する状況ではなく、研究、教育をどちらかに一元化し、各教員の負担を軽減し、研究・教育に専念できる持続可能な体制作りが急務である。特定の教員が超人的に働いて現状維持されている状況であるが、このシステムでは破綻を招くことも考えられる。



説明をする川野教授 1



説明をする川野教授 2



意見を述べる高原教授



水本教授の質問に答える川野教授



意見を述べる布川教授



評価委員質問に答える西田センター長

4. 活動報告の際に使用したスライド資料（説明者：川野徳幸教授）

配布資料に基づき、センターの活動・目的・使命、機構・運営、研究活動、教育活動、社会活動、予算、ネットワーク構築事業、将来構想について説明を行った。

平和科学研究センター活動報告 （2008年4月～2015年3月）

2016年2月19日

広島大学
平和科学研究センター

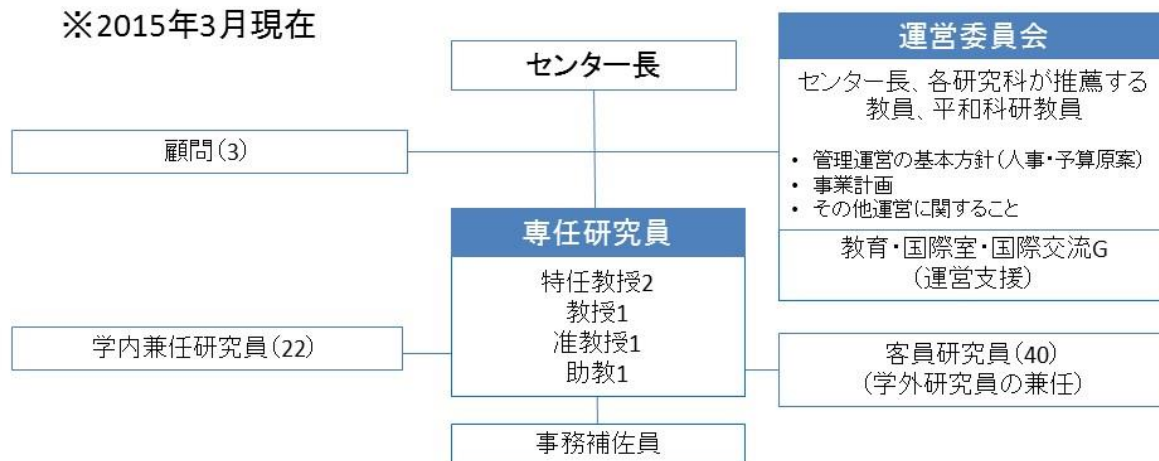
平和科学研究センターの活動・目的・使命

1. 研究活動	2. 教育活動	3. 社会活動
- 国内外の平和関連機関とのネットワーク構築 - 平和科学研究の推進・組織化 - 文献資料・データの収集整理 - 平和科学研究の成果・情報の提供	- 教養教育「平和科目」の担当 - 学部教育の担当 - 大学院教育(博士前期・後期)の担当	- パグウォッシュ会議の支援 - 市・県の委員会委員 - 新聞社との共同による被爆者アンケート調査の実施 - 来広中高生の平和教育の支援 - 普遍的な平和研究の知の拠点づくりのための基盤整備、及びネットワーク構築

2

機構・運営

※2015年3月現在



3

研究活動

4

研究活動の具体的内容

- シンポジウム
- 研究会
- 紀要(『広島平和科学』)
- 研究報告シリーズ
- 文献資料・データの収集と整理(約1万点)
- 専任研究員の研究

5

主催したシンポジウム・研究会

	シンポジウム	研究会
2008年度*	1	5
2009年度	1	4
2010年度	1	3
2011年度	1	3
2012年度	1	3
2013年度	1	2
2014年度	2	6
合計	8	26

*年度: 4月1日～翌年3月31日

6

シンポジウム(2008.Apr.-2015.Mar.) I

主催、及び共催(主たる実施者のもののみ)

第33回 核の被害再考(2008.11.28)

- ・ 川野徳幸 セミパラチンスク地区の核被害: アンケート調査・聞き取り調査から見えてくるもの
- ・ 今中哲二 チェルノブイリ原発事故の調査を通して学んだこと
- ・ 山本政儀 ビキニ原爆被災事件から半世紀: 今思うこと
- ・ 濱谷正晴 原爆体験と心の傷

第34回 Current Challenges for Peacebuilding in Sierra Leone and Liberia (2010.2.25) (第189回IDECアジアセミナー)

- ・ Memunatu Pratt
- ・ Anthony Lombeh Hena

第35回 環境と平和(2010.12.23)(故松尾雅嗣先生追悼記念)

- ・ 石田紀郎 カザフ・アラル海の環境破壊
- ・ 今中哲二 チェルノブイリ原発事故とその影響
- ・ 実川悠太 水俣病被害の実態

7

シンポジウム(2008.Apr.-2015.Mar.) II

主催、及び共催(主たる実施者のもののみ)(続き)

第36回 広島、そして福島の復興(2012.1.29) (広島平和構築人材育成センター、ピースビルダーズとの共催)

【基調講演】

- ・ 山川充夫 福島の復興—南相馬市民復興会議を中心に—
- ・ 斎藤紀 福島の直面している課題

【パネリスト】

- ・ 田中章弘、石田紀興、下久保誠司、衣山弘人

第37回 原爆研究の残された課題(2012.8.5) (広島大学文書館、原爆放射線医科学研究所計量生物研究分野との共催)

- ・ 平岡敬 韓国人被爆者問題を振り返って
- ・ 許光茂 韓国における被爆者問題
- ・ 大瀧慈 広島原爆被爆者のがん死亡危険度は直爆被曝線量では説明できない？

第38回 これからの平和研究を考える(2014.3.15)

- ・ 佐藤幸男 岐路にある平和学
- ・ 山根達郎 平和のための新しい国際紛争論
- ・ 友次晋介 核と人間の安全保障—平和研究と安全保障学の交叉—

シンポジウム(2008.Apr.-2015.Mar.) III

主催、及び共催(主たる実施者のもののみ)(続き)

第39回 混沌とする世界における国際機関の強化—ヒロシマの果たす役割は— 広島大学平和科学研究センター/新潟県立大学共催国際シンポジウム(2014.11.21)

【第Ⅰ部】戦後国際関係に果たした国際機関の役割

- ・ G. John Ikenberry The Future of Multilateralism: Governing the World in a Post-Hegemonic Era
- ・ 天野万利 『ジュネーブ軍縮会議』の取り組み—その成果と現状
- ・ 猪口孝 War Occurrence and Multilateral Institutions

【第Ⅱ部】混沌とする世界における国際機関の強化

- ・ David Held Gridlock: Why Global Cooperation is Falling When We Need it Most
- ・ 弓削昭子 Post-2015 Development Agenda and the Role of the United Nations
- ・ 西田恒夫 混沌とする世界と国際機関の強化

【基調講演】明石康 日本と世界の当面するチャレンジ

【第Ⅲ部】ヒロシマは何ができるのか？

- ・ Brian Finlay MULTILATERALISM IN A GLOBALIZED WORLD: Meeting Grand Global Challenges
- ・ 水本和実 被爆地からの訴えは核軍縮を促したか
- ・ 山本武彦 北東アジア非核兵器地帯の実現に向けた広島の役割
- ・ 川野徳幸 「ヒロシマ」の思想、そして今後の「ヒロシマ」の役割

2014年度第1回国際シンポジウム 「混沌とする世界における国際機関の強化 ーヒロシマの果たす役割はー」の様子(1)



I 部の討論で意見を述べる Ikenberry 先生



II 部の討論で意見を述べる Held 先生

10

2014年度第1回国際シンポジウム 「混沌とする世界における国際機関の強化 ーヒロシマの果たす役割はー」の様子(2)



元国連事務次長の明石康氏による基調講演



熱い議論が交されたIII部の討論の様子

11

シンポジウム(2008.Apr.-2015.Mar.) IV

主催、及び共催(主たる実施者のもののみ)(続き)

第40回 次世代に未来をどう引き継いでいくか

ー持続可能な開発のための教育(ESD)の観点からー(2015.2.4)

- ・ 木曾功 ESDの10年の取組みとこれから
- ・ 中山修一 韓国と広島でのESDの実践

12

共催シンポジウム(2008-2015)

共催したもの(【 】はホスト／実施機関) 10件

- ・ 合同シンポジウム(2008年6月18日ー韓国、済州市) 第2回日韓平和研究セミナー【済州大学】
- ・ 合同シンポジウム(2008年9月23～25日ーロシア、トムスク市) 3rd International Conference on Peace Studies and Peace Discourse in Education【トムスク教育大学】
- ・ 第14回広島国際シンポジウム(2009年3月26日)「セミパラチンスクにおける放射線の影響」【原爆放射線医科学研究所】
- ・ 合同シンポジウム(2009年10月31日ー韓国、済州市) 第3回日韓平和研究セミナー【済州大学】
- ・ 第15回広島国際シンポジウム(2010年3月5日、広島市)「世界の被ばく者の放射線被ばくとその影響」【原爆放射線医科学研究所】
- ・ 第16回広島国際シンポジウム(2011年1月12日、広島市)「広島の黒い雨と関連する課題」【原爆放射線医科学研究所】
- ・ 第17回広島国際シンポジウム(2012年1月25日、広島市)「世界の放射線被ばくとその影響」【原爆放射線医科学研究所】
- ・ 第18回広島国際シンポジウム(2013年1月31日～2月1日、広島市)“Additional Factors in Hiroshima Radiation Effects due to Atomic Bomb-Biophysical and Biometrical Challenges to Assessing Health Hazard-”【原爆放射線医科学研究所】
- ・ 第1回島根・セメイ国際シンポジウム(2015年1月24日、島根市)「世界の核被ばく問題～セミパラチンスク核実験場から福島原発事故へ～」【島根大学医学部総合医療学】
- ・ 第19回広島国際シンポジウム(2015年1月26日)「広島・長崎原爆における残留放射線の影響」【原爆放射線医科学研究所】

13

研究会

- 国内外、学内外の研究者による平和学、及び関連分野のテーマについての研究報告・講演
- 他機関との共催、複数の講師を招聘したシンポジウム等の形式で行うこともある

14

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)①

177回 2008. 7. 9

- 高田陽子: 20世紀メコンデルタ開拓の中の諸民族

178回 2008.10.29

- Tarja Vayrynen: The Role of Silence in Post-Conflict Peacebuilding

179回 2009. 1.21

- Diana Petkova: National Identity in the Process of Globalization

15

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)②

180回 2009. 1.27

Current Challenges for Peacebuilding in Afghanistan

- 宮原信孝: “Human Security” and Nation Building in Afghanistan
- 加藤美和: Impact of illicit drugs on the Afghan peacebuilding process and the establishment of the rule of law
- 工藤正樹: Security Sector Reform in Afghanistan
- 柿澤福郎: The current security situation of Afghanistan

181回 2009. 2.12

- 毛利和子: 現代中国外交へのアプローチ

182回 2009. 7. 2

- Robert McMahon: The 1971 India-Pakistan War and US Foreign Policy

16

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)③

183回 2009. 7. 6

- Yakov M Rabkin: The Zionist Revolution as Modern Jewish Identities

184回 2009. 7. 8

- 伊藤成朗: Health insurance in rural India: Strategies to assess People's perceptions

185回 2010. 3.17

- 宜保博哉: 沖縄県平和祈念資料館における収蔵資料の活用

186回 2010. 5.14

- 井上実佳: 国連平和維持活動(PKO)と「保護する責任」

17

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)④

187回 2010.10.13

- 西田竜也: A Comparative Analysis of the U.S. Alliance System in the Asia-Pacific: A Perspective of Alliance Theories

188回 2011. 3.16

- Volodymyr Tykhyy: Solving the social problems of the Chernobyl Sufferers: it's not over yet

189回 2012. 1.23

- 葉佐井博巳: 私の平和論－研究者として、そして入市被爆者として－

190回 2012. 1.20

- Nayani Melegoda: Statebuilding in Afghanistan

18

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)⑤

191回 2012. 1.27

- Memunatu Pratt: Sierra Leone's Peacebuilding and Development: Prospects and Challenges

192回 2012.10.31

「日本の近代史における東北～あらためて復興を問い直す」

- 山内明美: <東北>から生存基盤を考える
- 後藤一磨: 南三陸町防災対策庁舎の存置・撤去問題について～原爆ドームとの比較～
- 河西英通: 東北史から築く「平和と生存」の足場

19

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)⑥

193回 2012.11.2

- Alan Hunter: Coventry, Peace and Reconciliation

194回 2012.12.4

- 久保田弘信: 戦場カメラマンがみたアフガニスタン・イラク

195回 2013.6.3

- 菅野哲: 飯舘村民の避難生活の現状、そして今後は

196回 2014.1.21

- 久保田弘信: シリア内戦の現状と国際社会

20

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)⑦

197回 2014.6.16

- 菅野哲: 飯舘村民の現状、そしてこれから

198回 2014.6.30

- 今中哲二: チェルノブイリとフクシマ～放射能汚染と向き合うためには～

199回 2014.8.4

- 開沼博: 歴史的危機に学問はいかに向き合うべきか～福島学構築プロジェクトの実践から～

21

研究会(2008.Apr.-2015.Mar.)⑧

200回 2014.11.22

「ESDの10年と地域の取り組み」

【基調講演】

- ・ 三宅博之: ESDの10年と北九州市の取り組み

【事例紹介】

- ・ 小倉亜紗美: 広島地区のESDの取り組みと平和学
- ・ 青山秀雄: マレーシア・サワラク州でのESD活動に参加して

201回 2015. 1.23

- ・ 藤本穰彦: 足元からつくる平和—地域開発と環境からのアプローチ

202回 2015. 3.19

- ・ 佐藤尚平: 中東情勢と国際政治史

22

紀要(『広島平和科学』)

- ・ 年1回刊行
- ・ 400部印刷
- ・ 国内外の研究者、研究機関、図書館に配布

23

広島平和科学 第30号(2008)

著者名	論文タイトル
松尾雅嗣、谷整二	広島原爆投下時の避難ー川と橋を超えて
川野徳幸、平林今日子、松尾雅嗣、カズベック・アプサリコフ、タルガット・モルダガリエフ、大瀧慈	セミパラチンスク地区住民の核実験体験ー線量と距離に関して
小柏葉子	太平洋島嶼諸国の紛争と地域協力ーグッド・ガバナンス構築に向けての試みー
池野範男、川口広美、田口紘子、井上奈穂、伊藤直哉、南浦涼介、河村直明、三反田隆志	中学生の平和意識・認識の変容に関する実証的研究ー单元「国際平和を考える」の実践・評価・比較を通してー
Hideaki SHINODA	The Difficulty and Importance of Local Ownership and Capacity Development in Peacebuilding

24

広島平和科学 第31号(2009)

著者名	論文タイトル
ロニー・アレキサンダー	軍事化・生政治に直面する女たちー太平洋地域からの考察ー
村上登司文	中学生の平和意識についての比較ー上海、ホノルル、デンバー、京都の4都市の中学生の意識調査からー
Tetsuji IMANAKA and Noriyuki KAWANO	Radioactive Contamination and Social Consequences Caused by the Chernobyl Nuclear Accident
松尾雅嗣	核被害、紛争被害地域の平和観の国際比較
Tatsuo YAMANE	State failure and Armed Group: An Implication for Peacebuilding
Tetsuro IJI and Hideki FUCHINOUE	Toward a Better Understanding of Multiparty Mediation in International Relations
篠田英朗	平和構築における現地社会のオーナーシップの意義

25

広島平和科学 第32号(2010)

著者名	論文タイトル
篠田英朗	平和構築における現地社会オーナーシップ原則の歴史的・理論的・政策的再検討
中園和仁	マカオの地位をめぐる中葡関係
山下明博	世界遺産をめぐる国境紛争の原因
毛利聡子	国境を越える対抗運動の担い手ー世界社会フォーラムの10年を検証するー
川野徳幸、大瀧慈、岡田高旺	広島原爆投下後の爆心地付近における延焼状況の視覚化
Ajith Balasooriya and Hideaki SHINODA	The “Responsibility to Protect” at the End of Conflict: The Role of the International Community in Post-Conflict Peacebuilding in Sri Lanka

26

広島平和科学 第33号(2011)

著者名	論文タイトル
山下明博	世界遺産を巡る紛争における国際司法裁判所の役割
村上登司文	地方自治体の平和啓発事業と学校教育との協同
三上貴教	平和ランキングに基づく主要国比較から得られる示唆
長谷川晋・上杉勇司	イラク治安部門改革(SSR)への民間安全保障会社(PSC)の使用に関する米軍と英軍の違いの考察ー反乱鎮圧作戦の経験と正当性に対する理解の相違からの説明
池田佳代・川野徳幸	グアム統合軍事開発の人種政治的側面に関する考察ーグアム島公共水道システムを事例にー
川野徳幸	【研究ノート】チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への聞き取り調査備忘録: フクシマそして原発を考えるためにも
篠田英朗	平和構築における現地社会のオーナーシップと国家建設のジレンマーシエラレオネとスリランカの事例を中心にー

27

広島平和科学 第34号(2012)

著者名	論文タイトル
Reuben LEWIS and Hideaki SHINODA	Operationalizing Early Warning for Conflict Prevention and Peacebuilding in West Africa: A Case Study of ECOWAS Early Warning System
村上登司文	沖縄の平和教育についての考察－小中学生の平和意識調査から－
千代章一郎	丹下健三による「広島平和公園計画」の構想過程
山下明博	オスプレイの安全性に対する懸念
西佳代	アメリカのアジア太平洋地域に対する軍事的関与の構造－海軍によるグアム島統治史を中心に
平林今日子、川野徳幸、Talgat MULDAGALIYEV、Kazbek APSALIKOV、大瀧慈	セミパラチンスク核実験場近郊住民の精神的影響、そしてその背景要因
辛享根・川野徳幸	韓国人原爆被害者研究の過程とその課題
川野徳幸	広島大学学生の原爆・原爆被害理解度に関する試論

28

広島平和科学 第35号(2013)

著者名	論文タイトル
Tatsuo YAMANE	Securing Security Governance in Post-conflict Situation: A Framework of Conflict Prevention through ECOWASRN in West African Region
三上貴教	「ひろしまレポート」ランキング化試論－地球平和指数ランキングとの比較を交えて－
村上登司文	ドイツの平和教育の考察－ギムナジウムでの調査を中心に－
松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸	広島での平和観－平和宣言を通して－
辛享根・川野徳幸	韓国人被爆者問題をめぐる草の根交流

29

広島平和科学 第36号(2014)

著者名	論文タイトル
外川昌彦	マハトマ・ガンディーと原子爆弾－核抑止論と非暴力運動の意味
篠田英朗	国連PKOにおける「不偏性」原則と国際社会の秩序意識の転換
三上貴教	グローバルに民主主義を支える人材育成のための英語ディベートについて－アカウンタビリティ、クリティカル・シンキング、そして英語力－
友次晋介	医療保険外交の一里塚としての「アジア医療機構構想」－政治過程・教訓・遺産に関する一考察－
松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸	長崎の平和観－長崎平和宣言頻出単語の解析を通して－
Jaroslav KRASNY and Noriyuki KAWANO	Weapons of Mass Destruction and the Principle of Unnecessary Suffering: The Use of Nuclear Weapons in an Armed Conflict
小倉亜紗美	【研究ノート】短期留学プログラムを通じた広島大学「平和教育」の試み

30

研究報告シリーズ

- ・ 不定期刊の研究報告書
- ・ 年1、2点を刊行、印刷部数は400部
- ・ これまでに和文シリーズ51点、英文シリーズ30点を刊行

31

2008年度以降の研究報告シリーズ(和文)12点

- No.40 篠田英朗(編):現代平和構築活動の視点から見た広島戦後の復興史(2008)
- No.41 松尾雅嗣(編著):核の被害再考(2009)
- No.42 平和科学研究センター(編):松尾雅嗣教授退職記念論文集 平和学を拓く(2009)
- No.43 松尾雅嗣・谷整二(編):『ゆかりの友』関連 原邦彦資料目録(2010)
- No.44 川野徳幸(編):大北威 寄贈資料目録(原爆関連資料)(2010)
- No.45 上杉勇司・長谷川晋(編):平和構築と治安部門改革(SSR)ー開発と安全保障の視点からー(2010)
- No.46 川野徳幸・今中哲二・竹内高明(編):チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録(2012)
- No.47 篠田英朗・淵ノ上英樹:平和構築としての日本の近代国家建設:研究序論(2012)
- No.48 川野徳幸・今中哲二(編):ある「広島原爆早期入市者」の記録(2013)
- No.49 山下明博:軍事目的の無人航空機の危険性(2014)
- No.50 塩崎洋一・淵ノ上英樹:津波対策として議論され日杵小学校移転統合問題におけるPTAおよび地域住民としての取り組みについて(2014)
- No.51 平和科学研究センター(編)(責任編集:友次晋介・小倉亜紗美):広島大学平和科学研究センター／新潟県立大学共催国際シンポジウム 混沌とする世界における国際機関の強化ーヒロシマの果たす役割はー(2015)

32

2008年度以降の研究報告シリーズ(英文)9点

- No.22 Hideaki SHINODA (ed.): *Post-war Reconstruction of Hiroshima: From the Perspective of Contemporary Peacebuilding* (2008)
- No.23 Masatsugu MATSUO, Vladimir ROUVINSKI and Rafael SILVA VEGA (eds.): *Peace and Human Security* (2009)
- No.24 Yuji UESUGI (ed.): *Toward Bringing Stability in Afghanistan: A Review of the Peacebuilding Strategy* (2009)
- No.25 Hideaki SHINODA (ed.): *Peacebuilding in South Asia: Challenges and Opportunities* (2011)
- No.26 Hideaki SHINODA (ed.): *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sri Lanka* (2012)
- No.27 Hideaki SHINODA (ed.): *Peacebuilding and the Ownership of Local Society in Sierra Leone* (2012)
- No.28 Tetsuji IMANAKA, Noriyuki KAWANO and Masaharu HOSHI (eds.): *Proceedings of the 17th Hiroshima International Symposium –Lessons from unhappy events in the history of nuclear power development-* (2012)
- No.29 Bertha Z. Osei-Hwedie, Treasa Galvin and Hideaki SHINODA (eds.): *Indigenous Methods of Peacebuilding in Africa* (2012)
- No.30 Nayani MELEGODA and Hideaki SHINODA (eds.): *Peacebuilding Issues in Contemporary Sri Lanka* (2013)

33

専任研究員の研究

(2008年4月-2015年3月)

	該当期間	単著書	編著書	論文(単著)	論文(共著)	学会等報告
松尾 雅嗣	1年 (-2009/03)	－	2	3	1	－
小柏 葉子	2年 (-2010/03)	－	1	2	－	－
篠田 英朗	5年 (-2013/03)	1	7	23	2	7
川野 徳幸	5.5年 (2009/10-)	－	4	4	23	28
友次 晋介	1年 (2014/04-)	－	1	1	－	3
小倉亜紗美	1年 (2014/04-)	－	1	1	－	2
合計		1	9	32	26	40

※論文は学会等のProceedingsを含む
 ※編著書の中に単著論文を含む場合はそれぞれカウント

34

表彰

- 川野徳幸
 - － 第13回(平成26年度)広島大学学長表彰
- 小倉亜紗美
 - － 平成26年度広島大学女性研究者奨励賞受賞

35

研究費等採択状況 (2008年度～2014年度)

	対象期間	種別	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
松尾雅嗣	1年間	代表	2						
	～2009/03	分担	2						
小柏葉子	2年間	代表							
	～2010/03	分担	1	2					
篠田英朗	5年間	代表		1	1	1			
	～2013/03	分担							
川野徳幸	5・5年間	代表		1	1	1	1	1	
	2009/10～	分担		2	2	4	5	5	6
友次晋介	1年間	代表							
	2014/04～	分担							
小倉亜紗美	1年間	代表							
	2014/04～	分担							

(注)継続して実施している科研費は単年度ごとにカウント

36

2008年度以降 研究費等採択状況(代表)(1)

2008年度

- ・ 松尾雅嗣 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「原爆文学関連自筆資料の目録作成と電子画像化の研究」(直接経費320万円)
- ・ 篠田英朗 平成20年度外務省委託「平和構築分野の人材育成のためのパイロット事業」(直接経費17,100万円【再委託契約額を含む】)

2009年度

- ・ 篠田英朗 平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)「平和構築における現地社会のオーナーシップ育成の課題」(直接経費680万円)
- ・ 篠田英朗 平成21年度外務省委託「平和構築人材育成事業」(直接経費1,370万円)
- ・ 川野徳幸 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「セミパラチンスク地区の核被害実態調査研究:アンケート・証言・遺伝子解析を通して」(直接経費360万円)
- ・ 川野徳幸 平成20-21年度広島大学地域貢献発展研究「原爆被ばく資料の収集・整理・目録作成・電子画像化の研究及び広島市平和行政に関するオーラル・ヒストリー」(425万円)

2010年度

- ・ 篠田英朗 平成22年度外務省委託「平和構築人材育成事業」(直接経費663万円)

37

2008年度以降 研究費等採択状況（代表）(2)

2011年度

- ・ 篠田英朗 平成23年度外務省委託「平和構築人材育成事業」(直接経費334万円)
- ・ 川野徳幸 平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(B)「カザフスタン共和国セミパラチンスク地区住民の被ばく被害に関する総合的研究」(直接経費1050万円)

2012年度

- ・ 篠田英朗 平成24年度外務省委託「平和構築人材育成事業」(直接経費820万円)

2014年度

- ・ 友次晋介 平成26年度公益財団法人村田学術振興財団 研究者海外派遣援助「脱植民地化と英国の対中東原子力協力」(22万円)
- ・ 小倉亜紗美 平成26年度広島大学女性研究者奨励賞受賞(26.8万円)

38

2008年度以降 研究費等採択状況（共同）(1)

2008年度

- ・ 松尾雅嗣 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「コンピュータによる『カンタベリー物語』Hg, El写本及び刊本の言語比較」研究代表者:中尾佳行
- ・ 小柏葉子 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(B)「アジアにおける実践を通じた「差異化」克服の理論構築:平和協力への「もう一つの道」」研究代表者:吉村修

2009年度

- ・ 小柏葉子 平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)「移民外国人の社会統合問題をめぐる地域間比較研究:「内包」と「排除」の議論を超えて」研究代表者:河原祐馬
- ・ 川野徳幸 平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(B)(海外調査)「セミパラチンスク核実験場周辺住民の被ばく線量評価と低線量・低線量率被ばくのリスク」研究代表者:星正治
- ・ 川野徳幸 平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(A)「原爆被爆者の後障害に関する社会医学的研究」研究代表者:大瀧慈

39

2008年度以降 研究費等採択状況（共同）(2)

2011年度

- 川野徳幸 平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(B)「カザフスタンのセミパラチンスク核実験場やウラン鉱山地域の被ばく線量評価と健康影響」研究代表者:星正治
- 川野徳幸 平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(B)「広島における核・被ばく学研究基盤の形成に関する研究」研究代表者:小池聖一
- 川野徳幸 平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(C)「コンピュータを使った『カンタベリー物語』Hg, EI写本及び刊本の言語比較」研究代表者:中尾佳行

2012年度

- 川野徳幸 平成24-26年度科学研究費補助金基盤研究(A)「若齢期放射線被曝による晩発障害に関する社会医学的研究」研究代表者:大瀧慈
- 川野徳幸 平成24-26年度科学研究費補助金基盤研究(C)「コンピュータによる『カンタベリー物語』諸写本とキャクストン版の計量的比較」研究代表者:地村彰之

40

2008年度以降 研究費等採択状況（共同）(3)

2014年度

- 川野徳幸 平成26-29年度科学研究費補助金基盤研究(A)「カザフ核実験場周辺住民の放射性降下物の実態解明—線量評価及び健康影響解析—」研究代表者:星正治
- 川野徳幸 平成26-29年度科学研究費補助金基盤研究(B)「世界の核災害における後始末に関する調査研究」研究代表者:今中哲二
- 川野徳幸 平成26-28年度科学研究費補助金基盤研究(B)「広島における核・被ばく学研究基盤の拡充に関する研究」研究代表者:小池聖一
- 川野徳幸 平成26-28年度科学研究費補助金基盤研究(C)「コンピュータを使った『カンタベリー物語』Hg, EI写本及び刊本の比較と分析」研究代表者:中尾佳行

41

教育活動

42

専任研究員の教育活動-2008年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2008 (平成20)	国際協力研究科	平和学	松尾雅嗣	60
		グローバル社会地域協力論	小柏葉子	60
		平和構築論	篠田英朗	60
			松尾雅嗣	60
		平和共生演習	小柏葉子	60
			篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅰ	松尾雅嗣	60
			篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅱ	松尾雅嗣	60
			篠田英朗	60
			松尾雅嗣	2
		国際関係特論	小柏葉子	2
			篠田英朗	2
			松尾雅嗣	2
		International Relations	小柏葉子	2
			篠田英朗	2

43

専任研究員の教育活動-2009年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2009 (平成21)	国際協力研究科	グローバル社会地域協力論	小柏葉子	60
		平和構築論	篠田英朗	60
		平和共生演習	小柏葉子	60
			篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
		国際関係特論	小柏葉子	2
			篠田英朗	2
		International Relations	小柏葉子	2
			篠田英朗	2
	総合科学部	地域協力政策論	小柏葉子	30

44

専任研究員の教育活動-2010年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2010 (平成22)	国際協力研究科	平和構築論	篠田英朗	60
		平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
		国際関係特論	篠田英朗	2
			川野徳幸	2
		International Relations	篠田英朗	2
			川野徳幸	2
	総合科学部	紛争解決論	篠田英朗	30

45

専任研究員の教育活動-2011年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2011 (平成23)	国際協力研究科	平和構築論	篠田英朗	60
		平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		国際関係特論	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
		International Relations	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
	総合科学部	平和学	川野徳幸	30
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4

46

専任研究員の教育活動-2012年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2012 (平成24)	国際協力研究科	平和構築論	篠田英朗	60
		平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	篠田英朗	60
			川野徳幸	60
		国際関係特論	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
		International Relations	篠田英朗	4
			川野徳幸	4
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4

47

専任研究員の教育活動-2013年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2013 (平成25)	国際協力研究科	平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	川野徳幸	60
		国際関係特論	川野徳幸	4
		International Relations	川野徳幸	4
	総合科学部	平和学	川野徳幸	30
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4

48

専任研究員の教育活動-2014年度

年度	開設部局	授業科目名	担当者	時間
2014 (平成26)	たおやか (国際協力研究科)	平和と安全	西田恒夫	30
		恒久的平和と文化	木曾功	30
	国際協力研究科	平和学	川野徳幸	60
		平和共生演習	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅰ	川野徳幸	60
		平和共生演習Ⅱ	川野徳幸	60
		国際関係特論	川野徳幸	4
		International Relations	川野徳幸	4
			友次晋介	4
	総合科学部	平和学	川野徳幸	30
	教養教育本部	ヒロシマ発平和学	川野徳幸	30
		戦争と平和に関する総合的考察	川野徳幸	4

49

参考. 学内の各種全学委員等

- 教養教育本部平和科目ワーキンググループ委員・座長
- 教養教育本部・カリキュラム部門会議委員(教養教育本部併任)
- 総合博物館研究員
- 文書館・運営委員
- 原爆放射線医科学研究所研究推進会議研究員
- 東千田キャンパス機能充実検討ワーキンググループ 委員
- グローバル化推進室兼任
- スーパーグローバル大学創成支援事業推進チーム委員
- 環境報告書作成専門委員会
- 自然環境保全専門委員

50

社会活動

51

社会活動の概要

- 平和関連機関との国際ネットワーク構築(研究活動のスライドを参照、社会還元としての地の拠点づくり)
- 広島市「原爆による放射性降下物等の実態検証委員会」委員
- 広島県「ひろしま復興・平和構築研究編集委員会」委員
- 朝日新聞、読売新聞と共同で其々被爆者アンケート調査(毎年)
- 新聞、テレビ等におけるコメント(随時)
- テレビ番組制作への協力(随時)
- 修学旅行時に広島へ訪れた中高生の平和教育
- 学会などにおける各種委員
- 2005年第55回パグウォッシュ会議広島実行委員会事務局

52

専任研究員の 学会・社会への貢献(1)

松尾雅嗣

- 日本平和学会事務局長、副会長、理事、監事
- 財団法人広島平和文化センター評議員
- ひろしま国際センター「あじあ塾」講師

小柏葉子

- 国立民族博物館共同研究会研究員

篠田英朗

- 日本平和学会理事・企画委員
- JICA主催の各種研修事業(2006年度-2009年度)
- 外務省招聘イラク外交官セミナー(2008年)

53

専任研究員の 学会・社会への貢献(2)

川野徳幸

- NGOヒロシマ・セミパラチンスク・プロジェクト 顧問
- 第2回カザフスタン・市民交流会「カザフスタンの医師 広島と旧ソ連の核を語る」のコーディネーター(2010年7月)
- 第19回全国ボランティアフェスティバルひろしま・分科会20「語り継ぐボランティアたち～未来の子どもたちのために～」のコーディネーター(2010年9月)
- 広島市「原爆による放射性降下物等の実態解明に関する検討会」委員(2009年度)
- 広島市「原爆による放射性降下物等の実態検証委員会」委員(2010年度～)
- 政治社会学会理事 (2010年11月～)
- ひろしま復興・平和構築研究編集委員(広島県)(2012年度～2015年度)
- ひろしま平和研究・教育機関ネットワーク委員(広島県)(2013年度～)
- 飯舘村放射能エコロジー研究会 福島シンポジウム「福島原発事故が飯舘村にもたらしたもの」、総合司会(2012年11月)
- 読売新聞調査「被爆者意識調査」2010年以降毎年実施
- 朝日新聞調査「被爆60年アンケート調査」、「被爆65年アンケート調査」「被爆70年アンケート調査」

54

専任研究員の 学会・社会への貢献(3)

小倉亜紗美

- NPO法人瀬戸内里海振興会理事
- 西条・山と水の環境機構運営委員
- エコネットひがしひろしま幹事
- 東広島市立三ツ城小学校 4年生授業(2014年9月)
- 廿日市市立玖島小学校 全校授業(2014年10月)
- 広島大学附属高等学校 2年生授業－ESD実習(2014年11月、12月)

55

2008-2015年度 予算

	附属施設研究経費及び管理的経費	広報関係経費	合計	2015年度支出例	
				項目名称	金額
2008	2,744,000	67,000	2,811,000	外国雑誌購読料	400,000
2009	2,704,000	66,000	2,770,000	図書購入料	400,000
2010	2,664,000	65,000	2,729,000	研究会開催（謝金・旅費等含）	617,000
2011	2,625,000	64,000	2,689,000	ニュースレター	44,000
2012	2,586,000	63,000	2,649,000	紀要	300,000
2013	2,488,000	62,000	2,550,000	研究報告シリーズ（和文・英文）	150,000
2014	2,270,000	61,000	2,331,000	リーフレット	50,000
2015	2,223,000	60,000	2,283,000	交通費	160,000
ネットワーク構築事業			10,000,000	複写機借上費	40,000
				複写機保守費	40,000
				宅配料（福山通運等）	70,000
				消耗品・備品費	200,021
					2,471,021

56

ネットワーク構築事業－概要 （2014年04月－）

- ・ 広島被爆70周年を踏まえた、より国際的・普遍的な平和研究の知の拠点づくり促進
- ・ 同研究分野での広島大学の国際的プレゼンスを確立するための基盤整備
- ・ 同目的に資するための国際会議における発表及び海外機関との研究交流

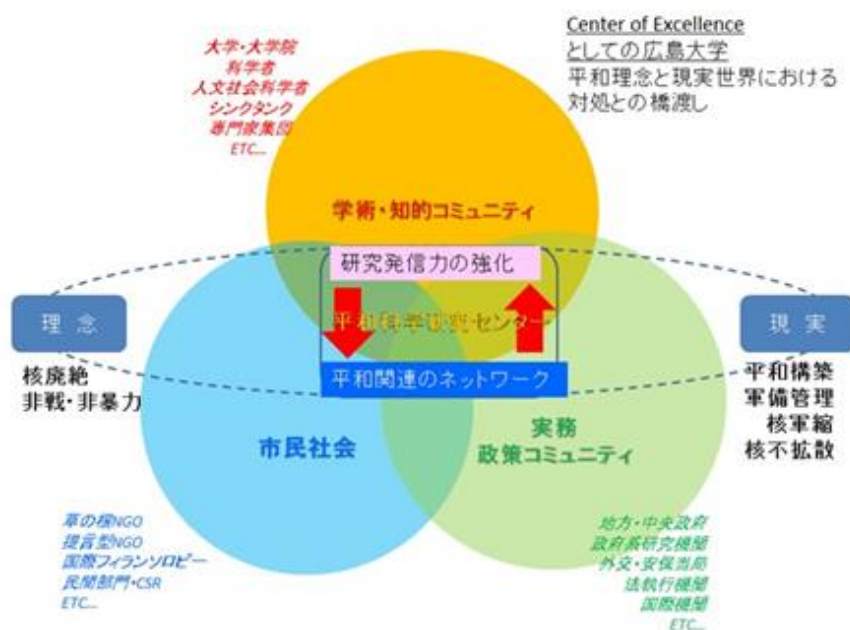
57

ネットワーク構築事業のねらい (予定される成果と効果)

- 海外の平和研究関連機関・施設とのネットワーク構築
- 「核なき世界」に代表される平和観を上記のネットワークを通してメッセージ発信
- 「核なき世界」を目指す海外の知的コミュニティにおける研究動向等の把握
- 崇高な核廃絶の理念と現実的な政策課題の橋渡し

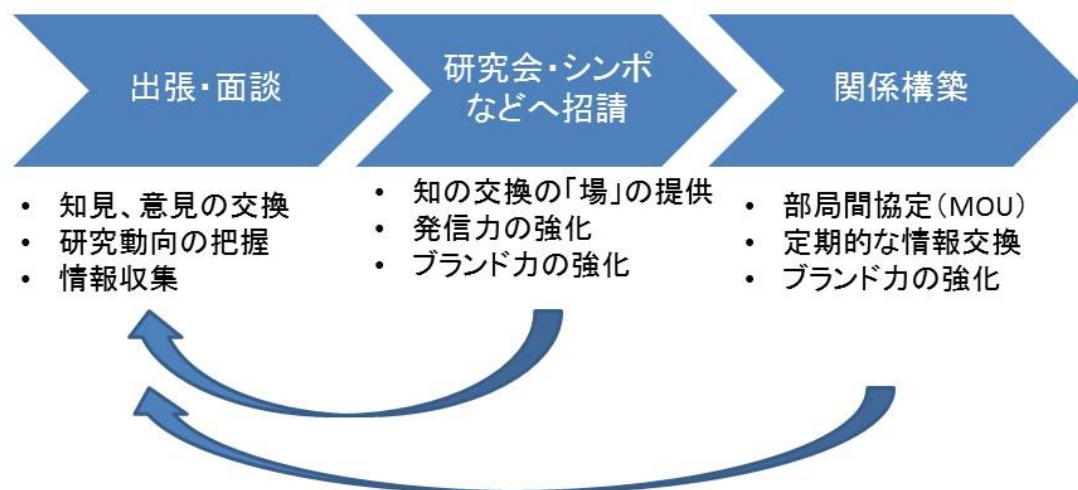
58

ネットワーク構築事業のイメージ



59

ネットワーク構築の活用



60

平和関連機関とのネットワーク構築(1)

(2014年04月－2015年3月)

UCLA TERASAKI Center(ロサンゼルス:5月)

西田恒夫センター長、理事会にて意見交換。UCLA学長と会談。

Center of International Relations and Sustainable Development(ベオグラード:5月)

西田恒夫センター長、第一次世界大戦100周年を記念したシンポジウムにて
日本からの唯一のパネリストとして発表

Aerospace International Research Centre (ロンドン:11-12月)

西田恒夫センター長、宇宙の平和利用、地球規模の協力促進に関し意見交換、専門誌
「ROOM」発刊 につき助言。広大、日本との連携に合意

East West Institute(広島来訪:3月)

米中関係、サイバー問題について西田恒夫センター長、及び専任研究員と意見交換

61

平和関連機関とのネットワーク構築(2)

(2014年04月－2015年3月)

【オーストラリア】2015年2月

- ボブ・カー氏 (オーストラリア元外相)
- ギャレス・エバンス氏 (オーストラリア元外相)
- アンソニー・ブバロ氏 (ローウィー研究所理事)
- ピーター・ジェニング氏 (オーストラリア戦略政策研究所長)
- ジェームズ・ダーデリアン氏 (シドニー大学国際安全保障研究センター
所長/教授)
- マイケル・ウェズリー氏 (オーストラリア国立大学教授)
- マイケル・ルストレンジ氏 (オーストラリア国立大学教授)
- アラン・デュポン氏 (ニューサウスウェールズ大学教授)

62

平和関連機関とのネットワーク構築(3)

(2014年04月－2015年3月)

【タイ】2015年3月

- Gothom Arga氏 (マヒドン大学教授)
- Surichai Wun Gaeo氏 (チュラロンコン大学教授)
- Chaianan Jantakananuruk氏 (国防研究所長)
- Umesh Pandey氏 (バンコクポストアジア担当記者)
- Saisak Kanpachai氏 (タイ国軍 Peace Operation Center長)
- Yuttana Phagpolygnam氏 (タイ日友好議連役員)
- Wipaks Noichida氏 (サタヒップ海軍基地司令官)
- Chatchai Photipak氏 (サタヒップ海軍基地副司令官)
- Surakiart Sathirathai (元副首相、元外相、アジア平和和解評議会[APRC]会長)
- Sorajak Kasemsuran氏 (APRC評議員)
- Weerasak Kowsurat氏 (APRC評議員)



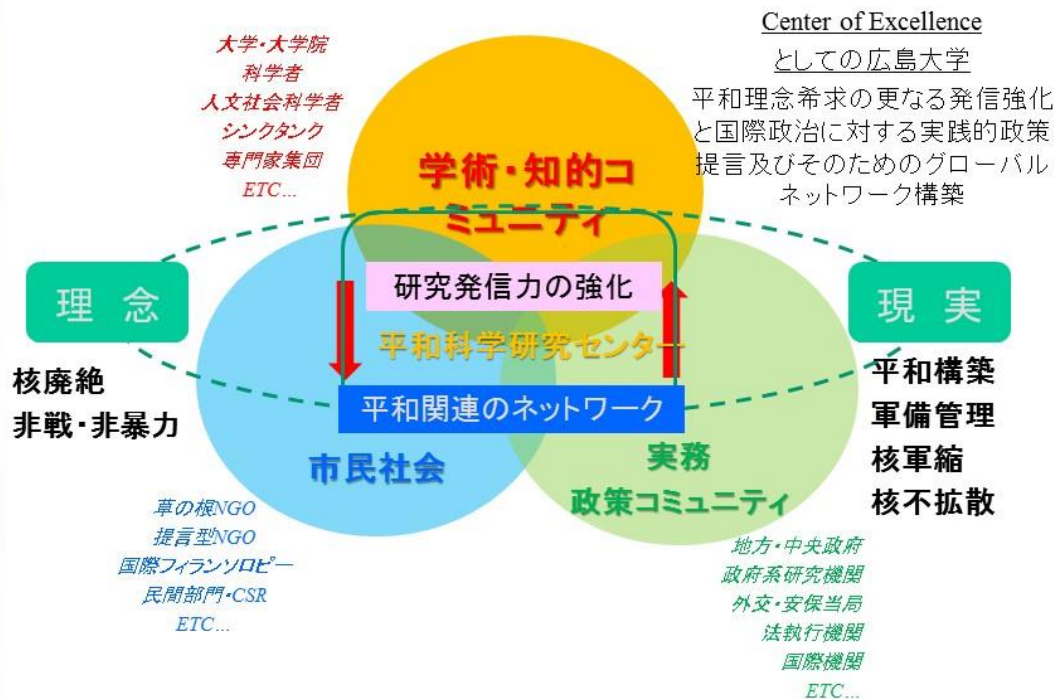
Surakiart元副首相、平和科学研究センター主催
(2015年7月実施)の国際シンポジウムにて基調講演



APRCとMOU締結検討

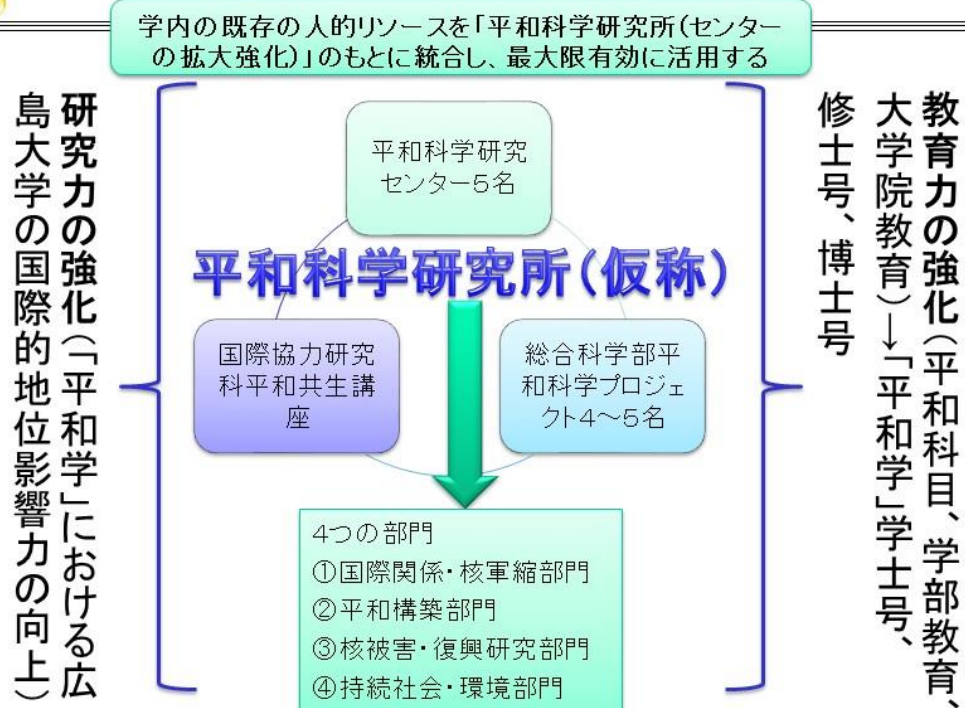
63

● 将来構想と実行計画(1): 開始事業



64

● 将来構想と実行計画(2)



65

5. 各委員との意見交換、各委員からの評価の記録

○川野 それでは、各委員の先生方との意見交換及び各先生方からのご指導を受けるということで進めたいと思っております。

研究活動、教育活動、社会活動、予算、ネットワーク構築事業および将来構想について、まずは、それぞれの視点から、それぞれの先生方にご意見を頂戴できればと思います。

その前に、もし私のプレゼンテーションの中でご質問等々がございましたら、よろしくお願いいたします。

○布川 研究活動の所で、川野先生は学長表彰を受けられていますが、これは平和科目の構築という点ですか。

○川野 そうです。

○布川 ということは、細かいことですが教育活動ですね。

○川野 そうですね。

○布川 平和科目については非常にご尽力いただいて、教養教育として大変助かっているのだと思います。

これは、教育活動に対する評価ですから、教育活動の評価対象とした方が良いと思います。

○川野 分かりました。教育活動の成果ということで、そちらの方に記載させていただきます。ありがとうございました。ほかにはございませんか。

○水本 教育活動についてですが、授業科目名があつて、担当者の名前が書いてありますが、これは平和科研として、ずっとこれを担当していく、メンバーが替わってもやるという科目になっているんですか。

○川野 それは難しいですね。大学院に関しては、そうだと理解しております。大学院重点化以降は、全ての准教授以上は、どこかの大学院に専任というかたちで所属することになっております。平和科学研究センターの場合は、今のところ、国際協力研究科に専任というかたちで所属することになっております。従って、友次先生も国際協力研究科に専任というかたちで所属しています。

○水本 リクワイアメントとして、そういう人は一人 60 時間といった決まりがあるんですか。通年で 1 コマ、2 コマとか。

○川野 半期で 4 単位です。

○水本 4 単位ということは、週のコマ数でいうとどのくらいですか。

○川野 週のコマ数で言えば、半期で 2 コマですね。例えば、平和学で言えば、4 単位ですから、週に 2 コマ講義します。

○水本 分かりました。

○川野 昔はもっと少なかったらしいんですが、どんどん増えてきていますね。

○水本 平和科目とおっしゃいましたが、その中に入っている科目というのは、要は総合科学部の平和学ですか。

○川野 違います。

○布川 それは、教養教育本部における平和科目です。

○水本 教養教育本部？

○川野　そうです。下のほうは総合科学部の吉村(慎太郎)先生が担当されている科目で、私が分担をしているものです。上のほうは私が主担当で担当している「ヒロシマ発平和学」という平和科目です。

○水本　全学で、こういう各学部が担当しているという関連科目はあるんですか。

○川野　平和科目ですか。

○水本　ええ。

○川野　平和科目は現在 23 科目用意されています。平和に関連する科目を立ち上げて、それを平和科目群としているわけです。広島大学の学部生は、卒業までに平和科目群の中から必ず 1 科目履修しなければなりません。

○水本　一つ取らなければならない。

○川野　はいそうです。

○水本　では、自分の属している学部が開講しているものを取ればよいということですか。

○川野　そういう傾向はあまり強くありません。

○水本　そうでもないんですか。

○川野　はい。

○水本　学内コンペティションでやるみたいなどころでもないんですか。

○川野　基本的には、平和科目設置時にいろいろ再編があって、総合科目とか様々な科目区分から平和に関係する科目を選び出し再編したり、新設したりして、平和科目群を作りました。

新規に立ち上げる時に、これは布川先生が一番ご苦労されたんですが、各学部を回って、平和科目を 1 個出してくれといった交渉を随分したんですが、かなり抵抗もありました。平和は教えられないとか、授業負担が増えるとか、様々な抵抗、議論がありました。

それでも、例えば、生物生産学部は環境という視点からの平和であるとか、貧困から考える平和とか、全学部から出ているわけではありませんが、ある程度、バランスの取れた科目群になっているという自負はあります。ただ、例えば工学、理学などからは出ていません。現在、交渉していて、平成 29 年度からは、工学、理学、医学あたりからも、それぞれの学部がそれぞれの分野からの視点で平和科目を提供いただけるものと期待しています。

○水本　教養ということでは、学生は自分が所属している学部以外のものを取っていいわけですか。

○川野　もちろんそうです。

○水本　むしろ、それは奨励される。

○川野　はい、そう考えています。

○水本　そういう中で、平和科研さんで持っている「ヒロシマ発平和学」というのはどうなんですか。

○川野　それは「人気科目」かということですか。

○水本　いえいえ。

○川野　この科目は、夜間主コースで開講していますので、8 割から 9 割の夜間主コースの学生が履修しています。

しかし、もしこの科目を東広島で開講すると、やはり競争はあるでしょうね。必ずしも一番人気だからいいというわけでもないですが、比較的、私の授業は受講生が多いほうだと思います。

○水本 分かりました。

○高原 研究機関だけでも教育も負担していくというのは、いったいどういうふうになっているのかなと、非常に関心があったんです。

今、最後に、将来構想ということで、平和科学研究所（仮称）がありました。これは私の理解だと、もう既にやっていることを入れておられる。平和科研が、上の四角けれども、国際協力研究科でも主要な授業を担当されて、総合科学部の授業にも進出しておられるわけですね。

○川野 それが、この図でいえば一方通行なんです。平和科学研究センターが国際協力研究科の平和共生講座に所属し、われわれは教育を担当している。そして、われわれは、例えば総合科学部の授業も担当しています。しかし、相手方からはそれほどコミットがないのです。ある意味での一方通行、双方向ではないのです。

○高原 そうすると、平和科学研究センターを僕らが外から見ますと、専任研究員がいて素晴らしい。要するに、我々は兼任でそれぞれの教授会に出て、いろんな行政負担も担当している中で、エキストラとして研究活動をやらされるという構造なわけけれども、広島大学の場合はそうではないだろうというイメージがあったんです。しかし、今、実態を伺うと、かなり大変な感じも受けるのですが、どうなんですかね。

○川野 先生、本当にそれをしっかり議事録に残しておきたいんです。先生がおっしゃるとおりなんです。例えば、私は一回事務にも確認したことがあるんですよ。私はどういう立ち位置なのかと。

私の話ばかりして恐縮ですが、私は平和科学研究センターに所属していながら、教育は国際協力研究科と総合科学部、あるいは教養教育本部でやっているわけです。それで、本籍は平和科学研究センターなんです。現住所はどこにあるか分からないような状況なんです。かなり複雑です。事実、週のうち2回か3回は西条なんです。特に今週などは大学院入試、修士論文の発表会がありましたから、東千田にいたのは1日だけです。今日だけです。そういう状況です。

一昔前は、平和科学研究センターの授業のノルマはあまりありませんでした。大学院重点化も進んでいなかったので、総合科学部で1コマとか、そういった状況でした。ところが、大学院重点化、あるいは特に独立行政法人化以後、教育への比重はどんどん大きくなっています。今は所属に関係なく全教員が授業をするという方向にあります。

それも点数化されております。何回授業をして、何人受講生がいてというのが、全て点数化されています。A-KPI(Achievement-motivated Key Performance Indicators：目標達成型重要業績評価指標)なる点数指標がありますが、今日の教授会の資料を見たら、B-KPI(Basic Effort Key Performance Indicators：広島大学教員エフォート指標)とまた新しいものをつくると言うんですね。とにかく、講義も含めてすべて点数化される傾向にあります。

つまり、何コマ持ち、その中で受講生が何名いてというのが評価の大きな基準になるわ

けです。だから、研究は重要という認識でありながら、一方で授業のノルマはどんどん増えているのが実態です。それは平和科学研究センターのみではなく、広島大学にある全ての共同研究利用施設、あるいは、文部科学省に直結している全国共同利用施設でも同じような現状だと思います。

大きな問題は、やはり平和科学研究センターが広島市内のこの場所にあり、研究は東千田で、そして教育に関しては西条で行っているという実態です。

○高原 その難しさというのは、どこですか。

○川野 それは勤務時間内での移動にかかる時間です。片道 1 時間半、往復 3 時間弱かかってしまいますので、その点からすれば、かなり非効率的です。この点は、抜本的に見直す必要があるかもしれません。

○西田 私のような部外者、今の立場から言うと変ですが、来てみて、やはり驚いたのは、まず先ほど先生から報告があったようにお金がないということで、これで研究しろ、教育しろという現状です。要するに、予算の執行先が光熱費、コピー代といったように既に決まっています。いわゆる、われわれが言うところの事業予算が一つもないということです。これで、いろいろな活動で頑張ってくださいとか言われてもなかなか難しい現状です。

それから 2 番目に、オフィスの場所が広大本部のある西条からかけ離れているということです。センターの教員からすれば、個人的に非常に負担がかかると同時に、センターという組織としては、いわゆる学長をトップとするところの中核的なそれぞれの機関、大学としての機関との連携を物理的に非常に難しくしている。テレビ会議とか何か言っていますが、日本人のテレビ会議の活用法は非常にへたくそだし、やはり慣れていません。

そういうことで、先ほどの話だと、特に川野先生のご経験のように、だんだん教育の負担が増えていくと、あるいは事務仕事が増えていくことになると、要するに物理的に西条に行く時間が多くなります。それで何が起こるかということ、私からすると、ここはもぬけの殻になってしまう。

だから、先ほどの平和科学研究所構想でいくと、あれはきれいに描けているのですが、実態は空洞化が既に起こってしまっていて、看板はあるけれども先生はどこにいるのか、それで、何をやっているかということ、よくわからない。学生はもちろんいない。だから授業はない。先生もいない。非常に優秀な事務の人が今ここを守ってくれているけれども、もし仮に、ある日突然、平和科学研究センターを訪れて「ちょっと見せてください」と言うと、誰もいない。看板しかない。しかも広島大学の看板は放送大学の大きな看板と一緒に付いてますから、これは放送大学だろうと思っている人がほとんどです。

そういう意味でも、ある種のビジビリティ（知名度）が、空洞化が起こっているがゆえに必要です。だから、戸籍上は本籍がここという先生方が、もちろんだんだん増えてきていて非常にいいと思うのですが、では、どこに住所がありますかといったら、先ほどの話ではないけれども、住所は実は東広島の西条ですということになって、そこに自分の教え子がいるということになると、自分の主とした教育活動のほとんど、90%以上が西条ということになります。

残る研究活動については、もちろん概念的には研究と教育はまったく別のものではありますが、特に大学院にとってはやはり教育と研究というものは、ある意味、私からすれば密

接な関係にあり、そのあたりが非常に希薄になっている。

そうすると、私はセンター長として落下傘で降りてきたら、そこにあるだろうと思った兵隊さんがいない。私は落下傘で降りてきた部隊長なんだけど、部隊のみならず、お金はあるのかと思えば、大砲もない、兵隊もいない。それで文句を言いに行こうと思うと、東広島まで行かなければならない。こういうのが実態なんですね。

このような状況にあるものですから、市民の方からしても、センターが何をしているのかよく分からないということになります。何かあそこに残ったキャンパスを管理しているのかなということに、ともすればなりがちで、それはやはり大学の難しい議論は別にして、市民が受けるセンターに対する評価に否応なくつながってくると思わざるを得ません。

このようなことから、やはり先ほど申しましたような広報活動を活発にしておくべきです。学生さんが出たり入ったりしているというのがあれば、仮に小さくても、あるいは本部から離れていても、実体が伴った研究機関に見えるのですが、それが非常に少ないので、なおさら必要です。

なおかつ、皆さん住所を持っているから、そちらのほうで科学研究費をとられたりしながら、それぞれの研究活動をされる。そうすると、いわゆるセンターの実態というものが、お金、人等々のいろんなリソースが極めて少なく、そしてそれらに対する大学の認識に対しても、私は正直言ってちょっとびっくりしました。

単に先生の数が少ない、予算の額が少ないだけではなくて、いろんなハンディを背負っていても、川野先生のように 100%それにコミットしている先生がたまたまおられるから、少なくともこれまでこのセンターを支えられてきたのであって、そうでなくなってくると、みんなどこかに張り付いているわけだし、学生のほうも当然、先生は総合科学部の先生だと思っているような状態なので、難しいのではないかと思います。

○川野　そういうことになりますね。

○西田　あるいは大学院国際協力研究科の先生だと思っていて、「いや、僕は違う。僕の本籍はセンターだ」というと、「へえ、知らなかった」と言う人は相当いるだろうと思います。学生からもビジビリティーがないセンターとは何なのかなと思われてしまいます。

教えることの負担をぎゅっと減らして、とにかく基本的にここにいる、そして研究活動をする。これが、ある意味での研究活動のフィールドであり、ベースだということになると、今、高原先生が言われたような、うらやましいなということになるんでしょうけれども、実態は、どんどん通勤電車で揺られて向こうに行って、疲れて帰ってきて、少しチェックして、では帰ろうかということで家に帰られるというのが、たぶん実際の生活なのだと思うんですね、川野先生。

○川野　そのとおりです。

○西田　そうすると、落下傘で来た将軍からすると、「あれ?」と。僕は星がいっぱいついていて偉いのかと思って来たら、部隊がいない。去年までは友次先生も小倉先生もいなかったんですね。川野先生と、先ほど言ったパートの女性がいますだけです。しかも、事務は当然のことながら西条ですよ。

だから、GL と会うのも西条まで行かないと会えないということになります。

○水本　平和科研を東広島に移転するという議論もあったんですか。

○川野 僕が知る限りではないと思います。

○水本 やっぱ、ここ被爆地にある意味もあると思うのです。

○布川 それはそうですね。

○川野 これまでは少なくとも、そういう話があったとしても、当事者であった平和科学研究センターのスタッフは、基本的にはずっと反対していましたよね。

○水本 だけど現実には自己分裂していきますよね。

○川野 やればやるほど、いればいるほど、仕事をすればするほど、どちらかに集約したほうがいいのかというのは実感としてありますね。

西田先生がおっしゃるとおりなんです。総合科学部で教えていると、みんな僕は西条にいてと思っている。国際協力研究科の学生は、僕が西条にいてと思っている。それで、ゼミ生に「こっちに来いよ」と言うのと、「何で?」と言うわけです。それで僕は、ゼミも最近、全部、西条でやっています。大学院のゼミ生は今6人いますが、全員、西条に住んでいる。ずっと東千田でやっていたんですが、ある日、ある学生から言われたんです。「交通費が大変だ」と。それで西条でやることにしました。

○西田 だから先生のご指摘の先ほどの話になると、もし将来的にこのような方向性が仮に正しいとしたら、その時点では向こうへ移らないと、あるいはここにきちんとした何かを、また違ったかたちの組織ができないことには、この実態部分、教育活動、あるいはほかの学部の先生方との自主的な連携なんてできない。

○川野 できません。物理的に大変です。だから、総合科学部の先生方とも、あるいは国際協力研究科の先生方とも深く連携する、そして教育・研究を展開するということであれば、正直、われわれが向こうに行ったほうがいいでしょうね。

○布川 将来構想の最大の問題は、センター長が今言われたことに尽きると思いますけど。特に、川野先生の負担が尋常ではない。

○水本 特定の人がスーパーマンになっていることでもっているという。

○布川 ええ、そうそう。だから、スーパーマンみたいな絶倫の体力を持っていないと、これはちょっと。

○川野 ないですよ。

○西田 だから、学長賞をもらっている。

○布川 ただ、もうお聞きになっていると思いますが、どうも平和国際科学研究科というのを立ち上げようという計画があるんですよ。

○川野 聞いてはいます。

○布川 そうすると、おそらく教育負担は、来年から霞キャンパスの学生の教養教育は東千田キャンパスでやるので教養教育と、国際総合科学部の専門科目、なおかつ大学院は平和国際科学研究科の重要科目をこちらでやってもらうということで、おそらく、それが実現すれば、こちらに集約できるのではないかと思うんです。

○川野 今、布川先生がおっしゃった大学院再編構想は見ましたが、なかなか難しいという気がします。

○布川 いや、でも、あれはやらないと駄目でしょう。

○水本 国際協力研究科は独立してやろうということですか。

- 川野 違います。国際協力研究科、社会科学研究科、総合科学研究科の再編です。
- 水本 その一部を東千田で展開するということですか。
- 布川 いや、特に平和の問題に関しては広島にないと意味がないと思うのです。
- 西田 シンボリズムが効かないですね。
- 川野 そこもまた悩ましいんですね。
- 西田 西条にしてみると、お酒のブランドになってしまいますね。
- 川野 原爆のイメージではないですね。
- 西田 これは半分ジョークなのですが、やはり東京とか諸外国の学者とか仲間と話していて、広島大学で平和研究をやっているのに場所が西条だということになると、「あれ？」と、こういうことです。
- 布川 そうそう。
- 西田 そんなものは乗り越えればという話ではあるんだけど、やはりある種の、特に広島というものの持っているブランド、それからシンボリズムはそれなりに重要で、例えば、学会で研究会をやったときに、午後はドームへ行って見てこようか、そういえば資料館に随分行っていないなということになる。あるいは市長を表敬訪問したいと、それが東広島市の市長という話になると、正直言って、ずっこけてしまいますよね。
- そういうことも含めて、その場所は選定する。ただ、おっしゃったように何かの固まりを持っておかないと、今の状況は耐えられない。
- 川野 ええ。だから布川先生がおっしゃるような、3研究科の中で平和だけを切り出して、ここで大学院教育を展開するということになる、あるいは学部教育を展開するということになれば、理想的な形かもしれません。
- 水本 先程布川先生のおっしゃった平和国際科学研究科（仮称）と平和科学研究所は両立しう話なんですか。それを念頭に置いて、平和科学研究所構想はあるのですか。
- 川野 布川先生がおっしゃったものは、つい数日前に、何かの機会に目にしたのですが、また形を変えて新たなものが出てくるかもしれません。
- 布川 高原先生がおっしゃったように、やはり平和科学研究センターだから、研究の専任スタッフだというふうに思われるし、実際それを期待されているわけですね。だから、できるだけスタッフの教育負担を緩和する、あるいは大学院をつくることによって、それぞれ意欲的な関係を持って、そのスタッフが教育負担を分担する格好で、お互いの研究の時間を確保していくことをやっていかないといけないと思います。
- おそらく諸外国からもそういうふうに期待されていますよね。
- 西田 いや、実際はそうです。私が言いたかったことを、ずばっと聞いていただいたので誠にうれしいのですが、要するに、このセンターって教育する所なんですか、研究する所なんですかということになって、その答えは、もちろん研究なんですけど、でも実態と合わないわけですね。
- 「では、専任研究員なる者は何をしているんですか」と言うと、「西条へ行って教えているんです」ということになる。
- 川野 そういう実態です。
- 西田 「では、事務とかは」と聞くと、「いや、それも西条なんだ」ということになる。

川野先生がスーパーマンだから科学研究費を取ってきたりして活発に研究している。しかし、それは、ある意味個人の研究であって、ここセンターが一丸として当たっているものかという点必ずしもそうではない。

だから本当に、今はスーパーマンが立っているから、あっちへ飛んで行って、こっちへ飛んで行って、今のところうまく交通整理をやってくれているんだけど、機構としては恐ろしく、もたもたしている。今、部外者が来て変だと言っているわけだから、どこかでとにかく早く正常な形にして、平和科学研究所構想を早く実行に移さないと、議論だけしていてもね。

○川野 そうですね。

○高原 どうしても教育機関だと、それぞれの善意に負うというところが大きいんですが、そこが度を超すと、もうつぶれてしまうんですよね。

○川野 そうですね。

○高原 ちょっと別の角度で。今、先生がおっしゃった広島シンボリズムということですが、そこを基盤にしながら国際的なネットワークをつくっていくのは非常にいいと思うんですね。

といいますか、これまでの広島市立の広島平和研究所は立派にやられていると思うんですが、僕らがやりたいと思ってできてないことを、これまで平和科学センターはわりとやってきたというふうに見えてきているんです。特に英語での出版物を出されていますでしょう。あれは大変だと思うんですが、非常に意味があると思いますね。

ですから、今ネットワークということを協調されてつくられるときに、もうオンタイムでホームページでどんどん英語の発信をしていくことを、ぜひ推進していただけると、広大の特徴が非常に出ると思うし、広島にあることの資産を生かすかたちになると思うんです。それが一点です。

もう一点、評価したいということを申し上げますと、今、先生がつながろうとされている国際機関、それから国際的な著名な方たちというのは、いわゆるツートラックの中のハイレベルだと思うんですね。ここが、僕らがなかなかできない部分なんです。

よく、私は国際政治が専門なものですから言われることが多いんですが、元首相とか元外相とか、ほかの国だと退役軍人の人たちと、日本はどうしてうまくつなげれないのかと。市民レベルでですね。

アジアパシフィックでリーダーシップネットワークとかがある。日本から行く人はいないですよ。実際に行かれています方も継続できないというかたちなので、そこを強化できない。まさに今、西田先生が来られて行われているイニシアチブ、非常に貴重だと思いますので、ぜひ推進してください。

○西田 ありがとうございます。そういう観点からも、先ほどの第1番のそれとの関係で、自分たちは何なのかということをもう一回再定義して確認する必要があります。それで、やはりわれわれは基本的には研究だということであれば、教育、教えるほうの負担を減してもらって、いい場が与えられれば、川野先生はいつでも飛んでいくという体制が必要です。あるいは、研究交流を活発にして、その大小は別にして、その研究を交換する場がここにもあるし、あそこにもある。そうなれば、次のときは定例会議でもお声がかかってく

るし、参加しても違和感がない。

今は本当におっしゃったとおりで、この広島大学の枠をちょっと超えて話をさせていただと、日本は今みたいにアジアのステージとか、アメリカだとかでいろいろなことをやっていますが、誰が話しているかというところ、ほとんど中国人とかアメリカ人です。「日本の人は？」と言うと、「いや、何年か前に何とかという先生が来たけれど、もう切れてしまっています」と。

特に今は授業の負担が多くて、要するに講義を持っていると出られないわけですね。そうすると、いくら優秀だと思っても、声を掛けても来ない人は呼んでもしょうがないとなります。あと日本はお金がないですから、そうすると、すぐ横にいた中国人が「お金だったら、僕がすぐ用意できます。何とか講座を1個つくりましょう。必要であれば先生もすぐ出します」となります。すると、あっという間に中国人になってしまうんですね。

それは、べつにイデオロギー戦争をしているとか、していないとか、中国はけしからんという話ではなくて、まさに研究のレベル、あるいは教育のレベルにおいて、日本のプレゼンスが、皆さんが思っている以上にマクロ的に急激に減ってきている。それは、彼らに悪意があるわけではない。善意があって声を掛けてきても、人もだんだん途切れていってしまう。やはり何でも賞味期限はあるんですね。賞味期限のある時に、そういう人に講義がきて、それがあつた種のインスティテューションが出来上がっていくところまでは、ある程度、必死で頑張らないといけません。

○高原 蛇足かもしれませんが、その時に余裕が必要ですよね。今、先生がおっしゃったスタッフの余裕。何かがあつたときに、さっと出ていける余裕が必要だということと、それからお金ですよ。国際化は非常にお金が掛かる。旅費だけでも、それから現地の滞在費とか、そういったところで行けないというのは実に残念なことです。

私、先ほど予算を拝見して、これは内訳がちょっと分からないのですが、事業費がないということだと、計上されているのは光熱費とか出版費とかだけということでしょうか。どうなっているのでしょうか。

○川野 要するに、年間230万あって、それは全て支出先が決まっているわけです。

○布川 事務経費で使うぐらいで。

○川野 事務経費というか、光熱、水道、コピー費等です。

○西田 定期刊行物とコピー代と、それから光熱・水道みたいなものでしょう。それしかない。

○川野 そうです。それで、研究は基本的に科学研究費でやれと言うことです。

○布川 勝手に取ってこいと。

○水本 平和科学研究センターのプロジェクト研究費というのはいないんですか。

○川野 ないです。それは初めて、ほぼ初めてと言っていいほど、西田先生がかなり努力をされて、直談判でネットワーク構築事業費をいただきました。

○西田 学長の所に直談判に行つて、これでは話にならんと。

○川野 正直、1,000万円いただけるなんてびっくりしました。

○水本 今度、2,000万円なんですかね。

○西田 今度は倍増だ、倍倍だと言って。だから、これは非常にイレギュラーだと思うん

ですよね。そういう中で、頂上会談というか、それで動かさないと金がないわけですね。レギュラーじゃないので、それでは続かないですよね。

○川野 そうなんですよ。

○水本 医学部なんか、マシンを1台入れるだけで数千万ぱっと入りますもんね。

○川野 学長裁量経費という項目があって、それは各部局、あるいはプロジェクトが申請しに行くわけです。その中で1,000万円という額はなかなかないですよ。普通、数百万円です。

だから、1,000万円、今年は2,000万円ですから、やはりそれは西田先生のお力が大だと思いますね。でなければ、そもそもネットワークがつくれませんか。研究者のネットワークはあるけれども、オーストラリアへ行って元外相に会うなんて、ちょっと考えられないことです。エバンズとか、あとカーさんとか言った元外相に会えるわけです。それはないですよ。

○高原 ですが、西田先生はベオグラードに行かれたんですよ。第1次世界大戦、今、ヨーロッパは100周年だから、ものすごくいろんな行事をやって。

○川野 やっていますよね。

○高原 そこへ、やはり日本からも送って、いろんな新しいつながりをつくるチャンスなのに、やはりできないんですよ。ですから、ぜひやってください。

○西田 ありがとうございます。

○川野 今、布川先生などが、ドイツの大学を中心とした戦争の記憶の問題に関する国際プロジェクトに関わろうとしています。ご承知のように、広島も原爆の記憶の問題に今取り組もうとしている。それで、お声掛けがあって、今ドイツのミュンスターと一緒にやろうという話が進んでいます。こちらからそういったプロジェクトを立ち上げることはなかなかありません。

○布川 EU（欧州連合）で、ミュンスター中心に7大学ぐらいが戦争の記憶の共同研究を第1次大戦以降ですが、やろうということでEUに申請をしたんですよ。その時にベンチマークが欲しいということで、広島大学に名指しで参加してもらえないかと言っています。

○高原 向こうからそう言ってきたんですか。

○布川 ええ。それで一応加わって、申請書にも名前を連ねて書類を書いたりしたんですが、結局、落ちたんですよ。

○高原 そうでしたか。

○布川 A評価は頂いたんですが、ぎりぎりのところでうまくいなくて。ただし、それでつぶすのではなくて、交流は続けていこうということになってはいます。

○川野 あれも何十億の企画でしたよね。

○布川 かなりの企画でした。

○川野 それがヨーロッパではできるんですよ。

○西田 それは、ちょっと若干、距離があると大変なんだけど、やっぱり知っているか知らないかですよ。誰だって人間ですから、こうやって名前を見たときに「ああ、川野さんがやっているんだ。だったら、私はよく知っているよ」と、「あの研究者はなかなかい

い」と、これで決まるんですよね。

書類審査は通らなければ話になりませんが、書類審査に通った後というのは、やはり知っているか、知らないか。「川野って知っている?」「ああ、俺どこかで会ったよ。なかなかいいプレゼンをしていた」ということになって、それでどんどんブランド力がついてくると思います。あとは、それを維持する継続力ですね。

最初の取っかかりは、私はそれなりにコネがあるから、作ることが出来ます。短い期間だけど、ある程度、そこから先をサステナブルにしていかないとね。

○川野 それも大きな課題ですね。

○西田 前市長、前知事、前大統領といった人たちは、退任後もいわゆるオピニオンリーダーとして活動します。そして、その多くが何らかのかたちで大学、研究所などに所属するわけですよね。そうすると、彼との個人的な繋がりが組織としてのつながりを生む。

自分たちの機関をアプローチするときに、自分はどこどこ大学、あるいはどこどこ研究所と提携している、パートナーシップがあるというときに、やはりそれなりの大学の名前が出ると、次の時、また売れ易いですからね。

○高原 やはり広島の名前は強烈ですね。

○西田 そうですね。ですから、いつまでもそれにただ頼ってられないから。

○川野 そうなんですよ。それはもう西田先生が来られた時から、ずっと議論していました。ご承知のように、原爆被爆者は今 18 万人ちょっとで、今、平均 80 歳ちょっとです。あと 10 年とか 20 年で新たなヒロシマを迎えざるを得ません。それまでに、やはりさらに一歩踏み込んだ普遍的な平和というのを、広島あるいは広島大学は考えていかなければいけません。いつまでも原爆、被爆だけに頼るわけにはいきません。西田先生が来られてから、そのことを特に強く意識するようになりました。

○水本 組織的なことをお聞きしていいですか。

○川野 もちろん何でもどうぞ。

○水本 運営委員会で各研究科が推薦する教員というのは、どういった人たちですか。

○川野 それは、後ろの資料に平和科学研究センターの規定がありますが、例えば、総合科学研究科。今、布川先生が運営委員でいらっしゃいますよね。総合科学研究科、文学研究科、教育学研究科、社会科学研究科、理学研究科、生物研科学研究科、国際協力研究科、工学研究科、そして原爆放射線医科学研究所から、それぞれ教授あるいは准教授が運営委員として選出されます。

なぜ、これらの研究科から運営委員を選出するようになったのかという経緯はよく分かりませんが、このようになっています。

○水本 この人たちは平和科研のことを理解している方なんですか。よき理解者なんですか。

○川野 きついことをおっしゃるな。そうあってほしいと願っています。

○水本 運営委員会は完全には自主決定できないわけですよね。

○川野 そうなんです。

○水本 その上の機関というと、どこになるんですか。

○川野 役員会です。

○水本 大学の執行部ですか。

○川野 執行部です。

○水本 学長、副学長。

○川野 役員会です。5年ぐらい前までは、布川先生、いつでしたかね。各センターは人事権を持っていたんですよ。例えば、新任を採用する際、平和科学研究センター運営委員会が委嘱した選考委員会が人選を行い、運営委員会で承認するという形でした。

現在は全て役員会に決定権があります。選考委員を誰にするかということまでは決められるかもしれませんが。

○水本 役員会が全て決めるという役員会の主要な人たちは、誰ですか。

○川野 広島大学の役員会は5名ぐらいですかね。

○水本 ああ、そうなんですか。その下に何か協議会とかはない。

○川野 ないです。確か人事委員会をつくるという話でしたよね。

○布川 ええ。

○川野 最初は各センターの人事権のみを役員会に移行させましたが、今後は各部局も結果として同じようなことになると思います。人事を学長の下、一元化するわけです。各部局、平和科学研究センターのようなセンターができるのは、人事をしたいという発議までです。

○水本 そうすると、平和科学研究センターの存在意義をきちんと理解した方が役員におられないと厳しいということになりませんか。

○川野 そうです。今はいいですよ、西田先生みたいな方がいらっしゃるから。

○水本 今の学長はサポーターなんですよ。

○川野 そうです。そもそも前浅原学長が西田先生を招へいしたわけですから。

○西田 ああ、引き継ぎはきっちりやっていただいたという印象はあります。

○川野 ええ。

○布川 国際的なプレゼンスということに関しては、現学長はかなり関心がありますね。

○西田 ご関心がありますね。

○川野 ええ、意識は高いと思います。学長になられて、やはり一番初めに考えられるのは、たぶん平和とか原爆とかということで、いかに広島大学は関わってきたのか、あるいは関わらなければいけないのかということ、強く認識されていると思います。

○西田 私がセンター長に着任し、同時期に広島大学はスーパーグローバル大学に選定され、世界トップ100の大学を目指すことになりました。そういう時に、広島大学は何が売りなんだろうと思うわけです。差別化というと、やはり平和なのではないかと思います。

○水本 広島大学の強みは、いろんな学部があることだと思うんですよ。それを踏まえつつ、平和というコンセプトで束ねる役割を平和科研がすれば、私はいいと思うんです。ところが、先ほどの科目構成を伺っても、各学部で平和科目を持っているということで、完全に分散してしまっていますよね。

私も「医学から見た戦争と平和」というのもお手伝いしているのですが。

○川野 先生、されてましたね。

○水本 それは医学部の人だけでやっているんです。

つまり、工学部も医学部も文学部もいろんな専門家がいらっしゃいますが、そういう人達を横断的に束ねて一つの平和の科目をつくったほうが本当はいいと思うんですよね。そういうイメージで平和科学研究センターが窓口になって、リーディングプログラムを果たせばいいなと思って、そういう方向でやっているのかなと思って伺ったのですが、ますます分散化している気がしています。

○川野 平和科目が目指すべき方向性は十二分に理解していただいているつもりです。平和科目には共通の課題というのがあるんです。平和に関連する諸施設に行ってレポートを書くという共通の課題があるんですね。23、24 科目あっても共通の課題があるし、シラバスは確認するし、授業見学は行くし、これまでにない取り組みであることは間違いないと思います。

○水本 だから、一つの研究の中に、いろんな学部の人たちを巻き込んで、平和科学研究センターのままで巻き込んでやるという。そうでなければ、学部だけで汲々としている人はなかなかできない点もありますので、シンポジウムでやるとか、そういうふうにして平和科学研究センターはやはりまとめになっているなというふうに進めるのも一つの学内の生き残り戦略だと思うんです。

あと、どこの大学も今、研究、教育、学内運営、社会貢献と、放っておいたらそうなってしまうよね。だいたい大学の執行部の人は学部の出身者が多いから、研究所というのを斜めで見ているので、教育の負担を増やそうとか、そういうルールに引っ張られてしまうと、研究がおろそかになります。研究所の存在意義は違うんだということを、もっとアピールしておかないと、そういう空気をつくっていかないとと思います。

私の所もそういう波にのまれたところが若干ありますので、ぜひ、それは頑張っていたきたいのと、事務の方も含めて研究所の存在意義の理解を深めておかなければならない。例えば、研究員も研究者であり教員ですから、事務方と対立する人がいると、事務の人も研究所の存在意義で敵に回してしまうんですね。やはり事務方の中にも、きちんと理解ができる人を、できるだけ上のほうの人にも理解を広めておくことは大事だと思いますね。

○川野 ありがとうございます。

○西田 あとは、水本先生に言っていて、極めて励ましになるんですが、やはり大学のキャンパスを越えたところにある種のサポーターがいる。「ああ、結構あれ、何かいい研究らしいよ」と。名前も売れていて、この前、東京に行って話したら、「ああ、君の所、何とか大学研究所ってあるじゃないか。あれはなかなかいいよ」というふうに、やはり広島市や広島県として、そういうものが一つでも二つでもあるというのは、やはりある種の宝だと思うんですね。

やはり広島というまちには悲惨な経験がある。ほかの県に比べれば、ある種の使命感という部分も、市として、あるいは県として持っている。そういうところに、具体化したものがやはり何かないといけない。

要するに、それをやっているところは資料館です。だから、川野先生に言うんですが、僕の受けている印象は、あまりにも経験がすごかったから、最初は当然そうだと思うんだけど、まさに「ノーモア・ヒロシマ」で伝承することがずっと続いてきて、伝承を越えた広島学というレベル、広島平和学というものが何か一つ実体として起きてこなかった、あ

るいはあまりないというところが非常にあるのではない。それは非常にもったいない。

日本のたくさんある市の中で、そういう意味でのブランド力。しかも、それは歴史的なものであり、かつ、なお普遍的な意味があるものとして受け入れざるを得なかったまちというのは長崎と広島しかない。東京大空襲はそういう性質ではないわけですね。だから、オリンピックでも持ってこないで東京はそういうものはない。

かつ、それについて誰もほかの県や都は異論がない。有無を言わさないものがあるんですよね。「平和、広島、何か文句ありますか?」「いやいや、それはない」となります。だから、広島は平和でもって手を上げれば、誰も反対する人はいない。ある意味で、これは変だと言えば変だけど、でも、それがパワーであり、力の源泉となる。

○高原　すごい資産だと思いますね。

○西田　そうだと思いますね。だから、ここ東千田はもっと積極的に活用すべきなのです。やっぱり正門に入ったときに、放送大学という大きな看板が目に入る。それで、駅で新幹線を降りてタクシーを拾ったときに、「東千田の広大」と言うと、「え?」と言われて、「あれ、広大? 西条まで行っていただけるんですか」というので、「いや違う」と説明が必要になる。タクシーを降りると「ああ、放送大学でしょう」となるわけです。要するに、放送大学と言わないとタクシーは行かないんです。

○水本　さっき広島女学院高校からタクシーで来たら、元の広大キャンパスの正門前で降ろそうとする。「ここですか?」「いや、もうちょっと先です」と言うわけです。結局、元のキャンパスの正門辺りで降ろされる。これでも広島のタクシーなんですが。

○川野　それは冗談ではなくて、いつもそうです。うちのゼミ生が広島駅で広大に行ってくれと言ったら、本当に西条に行ったんです。聞きもしないんです。迷わない。それで放送大学と言わないと来ない。これは本当ですよ。

○高原　先生とまったく同じ体験でした。

○西田　そうですね。

○高原　「放送大学ですか」と聞かれて。

○川野　それで「東千田」と言ったら、本当に昔の正門の前で降ろされるんです、「ここにありました」と。

○西田　放送大学の看板ををなくすというわけにはいかないから、その上に平和科学研究センターと大きな字で看板を作るべきですね。ちょっと学生に言って、大きなポスターでもいいから貼ってもらいましょう。

○川野　後ろのほうの時間もございますので、そろそろまとめに入りたいと思います。本日、いろいろとご指導いただきました内容は、テープに記録しております。それを文字に起こし、研究活動、教育活動、社会活動、予算、ネットワーク構築事業、将来計画等の項目別にその概要をまとめる作業を行う予定です。

それぞれの先生方、最後に、研究、教育、社会、予算、どれでも結構ですし、あるいは網羅していただいても結構ですが、最後に一言ずつ評価をいただきまして、本日の会は終了したいと思いますがいかがでしょうか。

布川先生から、もしよろしければ、評価なりをいただければと思います。

○布川　いや、もう本当に少ない予算の中でよくやっつけいらっしゃるなと思います。とり

わけ、大学もだんだん人員が減っていった、教育負担が増えていく中で、それを積極的に負担されている。川野先生が教養教育で平和科目の中心になっておられることによって、負担は大きいけれども、平和科研の認知度はかなり上がっています。

○川野 それはそうなんですけれども。

○布川 ええ。それはおそらく財産になるだろうと思います。そういう成果をつくっておられる。

それから、西田先生がセンター長に来ていただいて、ネットワークづくりに大きな弾みがついただろうと思います。いろんな可能性が出てきて、それなりに国際的にプレゼンスを上げるいい機会が出てきて、なおかつ大学全体としても広島大学の国際的プレゼンスを上げなくてはならない。しかもグローバルという点で、先ほど高原先生がおっしゃったように、英語での発信を特に強調されているので、それはちょうどいいタイミングで、今、共鳴し合っているなと思います。

願わくば、仮称ですが、平和国際科学研究科みたいなのができて、教育負担がある程度、解決されて、今後、研究施設として充実していく方向に行ければいいと思います。私は、その可能性は十分あると思いますので、この機会ですから、西田先生がセンター長でおられるときに、それを実現し、ルールをしっかり敷いていくべきだと思うし、今回の評価で、その前提条件がはっきり見えてきたのではないかと思います。以上です。

○川野 ありがとうございます。水本先生、よろしくお願いいたします。

○水本 今日、資料を拝見しまして、研究、教育、社会貢献、社会活動ですか、少人数で非常によくやっていたらいいと思います。特に、研究についても、研究シンポジウムの開催だけではなく、紀要の発行とか、研究報告書の発行など地道にやっておられて、よく継続してやっておられると思います。かなりしんどいだろうと思いました。

それから、教育についての負担も増えつつあるのですが、しかし、私の属している研究所と比べてみましても、個人の仕事量は非常に多いと思いますし、よく頑張っておられると思います。

あと、私が期待したいのは、広大執行部、あるいは私が所属する研究所執行部の中には、両研究施設を競争関係で捉える人が多いと思いますが、広島という狭い所で複数の研究機関があれば、やはりコラボできるのならコラボすべきだと思います。私はそう思っていますので、組織間で協調が難しくても、個人レベルではできるようでしたら協力させていただきたいと思います。それをしないと共倒れになるかもしれません。共倒れとは、すごく失礼ですが。

私のいる研究所も今、過渡期にあるんですね。今日拝見していて、同じような問題点に直面しておりますので、ぜひ率直な意見交換をさせていただきながら、共存させていただきたい。

それと、あと広島県とか広島市とか広島平和記念資料館とか広島平和文化センターへの貢献も期待されていますので、そういうところについても、ぜひ、よろしくお願いいたします。また、地元広島他大学におられる研究者についても情報を共有し、共同研究やシンポジウム、市民講座などを双方向で企画するなどのアイデアも含めて、ぜひ大いにやっていただきたいと思いますし、同じ平和を思考する組織自体が敵対視するのは、ばかげています

ので、ぜひ協調してやっていきたいと思っております。

最後に、ニーズがどんどん高まってくると、個人に対する負担が増えてきます。みんなスーパーマンでなければこなせなくなっていくと、分裂してしまいます。幸い、皆さん個人が即戦力のような方が多いのですが、これ以上いってしまうと、本当にスーパーマンにならざるを得ないので、それはどこかで組織的に解消したほうがいいと思います。それは、ぜひ知恵を絞っていただきたいと思います。以上です。

○川野 ありがとうございます。最後に、高原先生お願いいたします。

○高原 いろいろ申し上げられたので、申し上げそびれたことだけ申します。

明治学院大学国際平和研究所で私どもがやっていて感じることは、アカデミアだけではなくて、市民からの支援といいますか、モラルサポートを得ているから、非常に励みになるんですね。市民とのインターフェースといいますか、そこを僕ら側はわりに意識しています。

あともう一点は、先ほど水本さんがいみじくも言われたんですが、やはり事務サイドからの支持も大学の中では非常に重要ですし、学生からも支持されることが重要だと僕は考えています。その辺が、このように物理的に遠い所にあるとどういう感じのかなと思っただんですが、先ほど布川先生がおっしゃったように、個別の先生が授業で活躍されていて、やはり学生からも、あそこはきちんとやっているんだという感覚が醸成されているとすると、それは非常に資産になるだろうと思います。

それに関連するかなと思ったんですが、先ほど私が申し上げたのは、かなりハイレベルのネットワークですよ。これは非常に重要だと思います。現実政治への働き掛けという意味でも。また、片方で市民レベルのネットワークもあって、いろいろ役割分担をされていくのかもしれないんですが、例えば、国際平和研究学会（IPRA）、今度、シエラレオネでやりますよね。ですから、そういうところにもどんどん広島から派遣していただけるといいのではないかと、日本平和学会員としては非常に思います。

やはりどちらかだけというのではなくて、どちらとも交流しながら、コラボレーションと今、水本先生がおっしゃったのですが、それをやっていけるのが、開かれたという意味ですよね。排除しないでオープンなかたちでやっていくというのがいい方向だと思いますので、非常に期待しています。

ここ広島に広島大学平和科学研究センターがあるということが、僕らにとっては励みになるんですね。ですから、これからも倒れずに頑張っていただきたいと思っています。サステナブルな組織のありようをつくっていただければと思います。僕らは、その辺はよく分かりません。すみません。

○川野 本当にありがとうございます。

○西田 今日は本当に真摯というか、真面目に考えていただいて、自分の問題としてご報告いただき、私どもセンターの現状と将来について本当におっしゃるとおりのお話でございまして、特に自画自賛になりますが、自分が日ごろ考えていたものと、大きな方向性としては、おそらく3人の先生とも同じような方向を向いての励まし、応援のエールを頂いたのではないかと考えています。

ですから、今日のような外部評価の機会も使わせていただいて、ある程度の方角を提示

し、少なくとも学内の世論を推し進め、あるいは広島市民との関係も編み出すという、何か強く背中を押してもらったような気がいたしましたので、誠にありがとうございました。本当に時間を頂きまして、ありがとうございました。

川野先生、ご苦労さまでした。

○川野 いえ、とんでもございません。先生方、ありがとうございました。本当に温かいエール、同時に、強く背中を押していただいたと、まさに西田先生がおっしゃったのと同じようなことを思いました。西田先生が冒頭におっしゃったように、誠に直前でのお願いにもかかわらず、快くお引き受けいただいて、本当にありがとうございました。あらためて感謝いたします。今日は本当にありがとうございました。

おわりに

各委員の先生方から頂戴した評価の概要については、本書 43 ページに記載したとおりである。研究・教育・社会活動については、一見、各教員が、平和科学研究センターの研究者として研究に専念しているかのようにも見えるが、実際のところ教育負担、学内業務の負担が大きな比重を占め、研究時間の確保が困難であるとの指摘を受けた。これは、当センター所属の教員自身が実感しているところであり、いかにして改善していくのか早急に関係各位と検討したい。そういった中で、シンポジウム、研究会をはじめ、その他の研究成果から、現行の構成員の数で非常に努力しているという評価を受けた。また、科学研究費などの外部資金採択状況も評価された。しかしながら、それらは、各委員の先生方のご指摘通り、教員個人の努力によるところ大であり、当センターが組織一丸となった共通の研究課題を継続的かつ安定的に行うには、抜本的な改革が必要であることに変わりはない。そのためには、やはり、第一に、研究・教育の一元化の方法を検討すべきなのであろう。東千田キャンパスでの教育活動の実現、あるいは、平和科学研究センターの本部・西条キャンパスへの移転といった具体的な方策を検討したい。

本来ならば、各委員の先生方のご指摘通り、「研究センター」である限り、教育負担については軽減の方向で検討したいところではある。しかしながら、平成 26 年度開始の「スーパーグローバル大学創成支援事業」とその目標実現のために現在取り組んでいる大学の組織改革、教育改革等を勘案するに、教育の軽減は現実的には困難に思える。また、教育と研究はある意味、表裏一体であり、その分離は現実的ではないという側面もあろう。それであれば、研究時間の確保、そして、研究・教育の効率化を考え、やはり、先に挙げた研究と教育の一元化が現実的な検討事項だということになる。もちろん、教育負担の軽減については、担当する教養、学部、大学院のそれぞれと可能な範囲で検討したいとは考えている。

予算についてはその拡充が必要である。現状の予算規模では、運営上の事務経費のみで、現行のネットワーク構築事業を展開することは不可能である。現在、学長裁量経費で実施している平和関連研究施設とのネットワーク構築事業などは正式に予算化し、継続的・安定的に実施することが肝要であろう。このことは、国内外の平和関連機関・組織間の繋がりを深化させ、さらには平和科学研究センターの知名度の向上に寄与するであろう。

西田センター長の着任以来展開している海外の平和関連施設とのネットワーク構築事業については、高い評価を受けた。豊富な外交経験を有する西田センター長を迎えた今、本事業を世界的に展開する好機であるといえよう。これまで展開したネットワーク構築事業は非常に成功裏に行われている。訪問先の一つであった香港城市大学とは、現在、大学間国際交流協定締結に向けて、準備を進めている。今後、更に積極的に本事業を展開し、平和科学研究センターのプレゼンスを高めていけるものと確信している。

将来構想については、これまで掲げてきた「平和科学研究所」構想に全面的に賛同をいただいた。繰り返しになるが、その実現のためにも現在のように教員が東広島と東千田を行き来する状況ではなく、研究、教育をどちらかのキャンパスに一元化し、各教員の負担を軽減し、研究・教育に専念できる持続可能な体制作りがまずは肝要である。同時に、学内の国際協力研究科（平和共生講座）及び総合科学部（平和科学プロジェクト）とさらなる連携・協力関係を構築していくことも重要である。

現在の平和科学研究センターは、各委員の先生方からのご指摘にあるように、教員が業務を過度に負担し、現状を保っている状況である。このシステムでは破綻を招くとの指摘を受けたが、われわれ自身もそれを危惧している。そうならないためにも、既述の研究・教育の一元化、学内でのさらなる連携・協力、そして、「平和科学研究所」構想の実現に努力したい。そのことが、とりもなおさず広島大学の研究力の強化・教育力の強化に繋がるものと確信している。

最後に、平和科学研究センターの活動にご支援、ご協力いただいた多くの関係者の皆さま、また、ご多忙の中、外部評価委員として真摯にご評価頂きました明治学院大学高原孝生教授、広島市立大学水本和実教授、広島大学布川弘教授にあらためて御礼申し上げます。先生方からいただきました評価・ご指導を今後に生かして参ります。

平和科学研究センターは、本外部評価も糧に、さらなる発展に努めてまいります。

平和科学研究センター・教授
川野徳幸

広島大学平和科学研究センター外部評価報告書（2008 年 4 月～2015 年 3 月）

発行 2016 年 11 月発行
広島大学平和科学研究センター
〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89
TEL: 082-542-6975 FAX: 082-245-0585
E-mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/>

印刷 株式会社 ニシキプリント
〒733-0833 広島市西区商工センター7丁目 5-33

© 2016 広島大学平和科学研究センター